岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130

# 十六夜山古墳
# 十六夜山遺跡

県立津山高等学校校舎改築に伴う発掘調査

1998

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130

# 十六夜山古墳
# 十六夜山遺跡

県立津山高等学校校舎改築に伴う発掘調査

1998

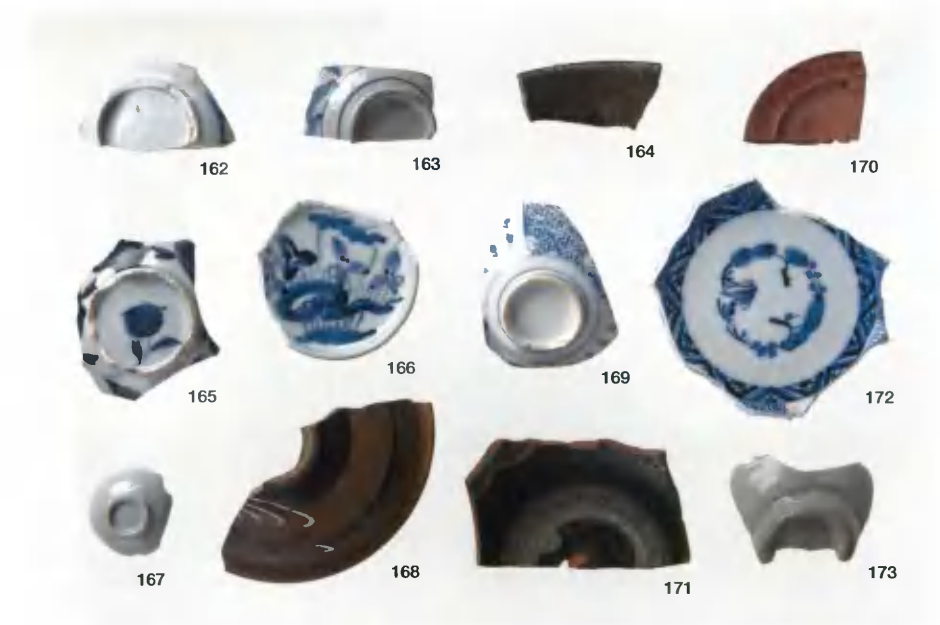
岡山県教育委員会

1　十六夜山古墳周濠検出状況（北西から、背景は後円部残丘）

2　十六夜山古墳出土埴輪

溝 4 出土遺物（1/3）

1　溝出土遺物（1/3）




2　土壙出土遺物（1/3）

1　柱穴列出土遺物（1/3）

2　石組み 1 出土遺物（1/3）

3　井戸 1 出土遺物

4　木棺墓出土遺物

# 序

本書には、津山市椿高下、岡山県立津山高等学校敷地内に所在する十六夜山古墳・十六夜山遺跡の発掘調査結果を収載しました。

岡山県立津山高等学校は、1900年（明治33年）の岡山県津山中学校創立に始まる、歴史ある学校であります。特に、津山高等学校本館は、創立当初の建築をそのまま残す貴重な建造物で、国の重要文化財にも指定されています。そのほかの大部分の校舎等は約40年前に建てられ、現在では老朽化が目立つことから、創立百周年にむけて校舎の改築を行うことになりました。

津山高等学校の敷地内には、本館とならんで学校のシンボルともなっている十六夜山があります。これは、従来から大形の円墳であろうといわれてきた古墳です。そのほかにも、この付近一帯には江戸時代の武家屋敷跡が広がっていることが、江戸時代の文献や絵図から知られていました。校舎の改築にあたっては、このような遺跡の取り扱いに十分に配慮する必要があり、遺跡の範囲確認調査を行いながら、協議を重ねてまいりました。その結果、工事施工部分については、やむなく記録保存のための発掘調査を行うことになりました。

調査の結果、十六夜山古墳は円墳ではなく、二重の周濠を巡らす、美作でも有数の大規模前方後円墳であることが判明いたしました。この古墳は周濠の一部のみの調査でしたが、多数の埴輪が出土するなど、貴重な資料を得ることができました。十六夜山古墳以外にも、弥生時代の竪穴住居をはじめとする集落跡や、江戸時代の武家屋敷の一部と思われる町割りの溝や塀の跡、井戸などが確認されました。

これらの成果を収めたこの報告書が、学術研究に寄与でき、さらに文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば、これに過ぎる喜びはありません。

最後に、発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員の方々をはじめ、県立津山高等学校ならびに関係各位から賜りました多大なご指導とご協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成10年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　　籔　本　克　之

# 例　　言

1．本書は、岡山県立津山高等学校校舎改築に伴い、岡山県教育庁財務課の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、十六夜山（いざよいやま）古墳・十六夜山遺跡の発掘調査報告書である。

2．十六夜山古墳・十六夜山遺跡は、津山市椿高下62に所在する。

3．発掘調査は計４次にわたって行い、第１次確認調査を1993（平成５）年８月、第２次確認調査を1994（平成６）年10月～11月、第１次全面調査を1995（平成７）年９月～12月、第２次全面調査を1997（平成９）年４月～５月に実施した。発掘調査の総面積は4,080㎡である。

4．発掘調査の担当者は、第１次確認調査が桑田俊明、宇垣匡雅、第２次確認調査が植月康雅、尾上元規、第１次全面調査が木原義明、延堂守、金田善敬、樋口雅夫、第２次全面調査が井上弘、木原、尾上である。なお、発掘調査の体制については別記した通りである。

5．発掘調査にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の水内昌康、近藤義郎の両先生より指導、助言をいただいた。

6．報告書の作成は、1997年６月～11月の期間に岡山県古代吉備文化財センターにて行い、尾上が担当した。

7．報告書の作成にあたり、近世陶磁器の鑑定を佐賀県教育庁文化財課大橋康二氏に依頼し、有益な教示をいただいた。本書における近世陶磁器の産地、年代に関する記述は、基本的にこの鑑定結果にしたがっているが、一部鑑定を受けられなかった資料もあり、部分的に報告書担当者の私見をまじえている。

8．本書の執筆は尾上、金田が担当し、各文末に文責を記した。また全体の編集は尾上が行った。

9．出土遺物および図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－3）において保管している。

# 凡　　例

1．本書に記載された高度値は海抜高であり、図中に示した方位は第１図・第３図が真北、それ以外は磁北である。

2．遺物番号は、遺物の種別に関わらず通し番号とした（１～187)。

3．近世の遺構について、一部の挿図中で以下の略号を使用した。また柱穴については各柱穴列ごとに番号を付けている。

柱穴列＝A　溝＝B　井戸＝C　石組み＝D　土壙＝E　木棺墓＝F　集石＝G
柱穴＝P

4．遺構・遺物の個別の実測図の縮尺は基本的に以下の通りとし、図中にも表示している。

（遺構）竪穴住居 1/80　土壙（弥生時代）1/30　柱穴列・溝 1/100　木棺墓 1/30
井戸・石組み・土壙（近世）・集石 1/40

（遺物）土器・陶磁器・瓦・漆器 1/4　石器 1/2・1/3　土製品 1/2　埴輪 1/5
金属製品 1/2・1/3

5．図版の遺物写真のうち縮尺設定したものは表示した。

6．図版のうち遺物写真に付した番号は、挿図に付した遺物番号と一致する。

7．第２図は建設省国土地理院発行２万５千分の１地形図（「津山東部」・「津山西部」）を複製、加筆したものであり、第３図は『岡山県史』第六巻・近世Ｉより複製、加筆したものである。

8．第20図をはじめ、掲載した十六夜山古墳後円部残丘の地形測量図は、県立津山高等学校に勤務する古市秀治氏が1993年に津山高等学校社会部の活動の一環として調査、作成したものである。氏よりその原図のコピーを提供していただき、今回の調査区との合成を行った。なお、測量調査結果は下記の文献ですでに公表されている。

古市秀治「十六夜山古墳の測量調査」『紀要』第１号　岡山県立津山高等学校　1994

# 目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
第２章　発掘調査の経緯と経過 …… 4
　第１節　調査にいたる経緯 …… 4
　第２節　発掘調査・報告書作成の経過 …… 4
　　１．第１次確認調査の経過 …… 4
　　２．第２次確認調査の経過 …… 4
　　３．第１次全面調査の経過 …… 5
　　４．第２次全面調査・報告書作成の経過 …… 6
　　５．発掘調査日誌抄 …… 6
　第３節　発掘調査・報告書作成の体制 …… 7
　第４節　調査後の整備（十六夜山古墳） …… 8
第３章　確認調査の概要 …… 9
　第１節　第１次確認調査の概要 …… 9
　第２節　第２次確認調査の概要 …… 10
第４章　全面調査の概要 …… 12
　第１節　調査地点の概要 …… 12
　第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 13
　　１．概　　略 …… 13
　　２．竪穴住居 …… 13
　　３．土　　壙 …… 15
　　４．遺構に伴わない遺物 …… 15
　第３節　十六夜山古墳 …… 16
　　１．古墳の現状 …… 16
　　２．周濠の検出状況 …… 16
　　３．墳丘の復元 …… 17
　　４．埴　　輪 …… 18
　　５．須恵器 …… 29
　第４節　古代の遺物 …… 30
　第５節　近世の遺構と遺物 …… 31
　　１．概　　略 …… 31
　　２．　　道 …… 31

3．柱　穴　列 …… 37
4．　　溝 …… 39
5．井　　戸 …… 40
6．石　組　み …… 43
7．土　　壙 …… 45
8．木　棺　墓 …… 48
9．集　　石 …… 48
第5章　ま　と　め …… 51
第1節　十六夜山古墳の築造年代と評価 …… 51
第2節　近世の遺構・遺物の変遷について …… 54
報告書抄録 …… 56

# 挿 図 目 次


第１図　調査位置図 …… 1
第２図　周辺の遺跡分布図 …… 2
第３図　津山城下町図 …… 2
第４図　調査区配置図 …… 5
第５図　現地説明会風景 …… 5
第６図　新校舎における十六夜山古墳
　　周濠位置の表示 …… 8
第７図　Ｔ１Ｅ・Ｗおよび出土遺物 …… 9
第８図　Ｔ４Ｅ・Ｗ・Ｔ10 …… 10
第９図　仮校舎北棟部分遺構配置図 …… 11
第10図　十六夜山古墳周濠部分断面図 …… 11
第11図　柱穴列１・２ …… 11
第12図　十六夜山遺跡地形復元図 …… 12
第13図　弥生時代の遺構配置図 …… 13
第14図　竪穴住居１および出土遺物 …… 13
第15図　竪穴住居２ …… 14
第16図　竪穴住居２出土遺物 …… 15
第17図　土 壙 1 …… 15
第18図　遺構に伴わない弥生時代の遺物 …… 15
第19図　十六夜山古墳周濠検出状況 …… 16
第20図　十六夜山古墳の墳丘復元案 …… 17
第21図　円筒埴輪の諸属性と統計 …… 19
第22図　十六夜山古墳出土円筒埴輪(1) …… 20
第23図　十六夜山古墳出土円筒埴輪(2) …… 21
第24図　十六夜山古墳出土円筒埴輪(3) …… 22
第25図　十六夜山古墳出土円筒埴輪(4) …… 23
第26図　十六夜山古墳出土朝顔形埴輪 …… 24
第27図　十六夜山古墳出土形象埴輪(1) …… 25
第28図　十六夜山古墳出土形象埴輪(2) …… 26
第29図　十六夜山古墳出土形象埴輪(3) …… 27
第30図　埴輪出土位置図 …… 28
第31図　十六夜山古墳出土須恵器 …… 29
第32図　古代の遺物 …… 30
第33図　近世の遺構配置図 …… 32
第34図　柱穴列１・溝１・２ …… 33
第35図　柱穴列２・溝３・４西半部 …… 33
第36図　柱穴列３・溝３・４東半部 …… 33
第37図　柱穴列４・溝５ …… 34
第38図　柱穴列５・６・溝６ …… 34
第39図　柱穴列７～９・溝７ …… 35
第40図　道に伴う柱穴列出土遺物 …… 35
第41図　道に伴う溝出土遺物(1) …… 35
第42図　道に伴う溝出土遺物(2) …… 36
第43図　柱穴列10 …… 37
第44図　柱穴列11・溝８ …… 37
第45図　柱穴列12 …… 37
第46図　柱穴列13 …… 37
第47図　柱穴列14 …… 38
第48図　柱穴列15・16・溝18 …… 38
第49図　柱穴列出土遺物 …… 38
第50図　溝13～17 …… 39
第51図　溝出土遺物 …… 39
第52図　井戸１および出土遺物(1) …… 40
第53図　井戸１出土遺物(2) …… 41
第54図　井 戸 2 …… 42
第55図　井戸２出土遺物 …… 43
第56図　井戸３および出土遺物 …… 44
第57図　石組み１・２および
　　石組み１出土遺物 …… 45
第58図　土壙２～11 …… 46
第59図　土壙12・13 …… 47
第60図　土壙出土遺物 …… 47
第61図　木棺墓および出土遺物 …… 48
第62図　集石１・２ …… 48
第63図　集石１出土遺物 …… 49
第64図　津山盆地における主要
　　首長墳の分布 …… 52
第65図　岡山県内石見型盾形埴輪の分布 …… 53
第66図　近世の遺構・陶磁器の変遷 …… 55

# 表　目　次

第１表　円筒埴輪観察表 …… 23
第２表　近世陶器観察表 …… 49
第３表　近世磁器観察表 …… 50

# 図　版　目　次

巻頭カラー図版１
　　１　十六夜山古墳周濠検出状況
　　２　十六夜山古墳出土埴輪
巻頭カラー図版２
　　溝４出土遺物
巻頭カラー図版３
　　１　溝出土遺物
　　２　土壙出土遺物
巻頭カラー図版４
　　１　柱穴列出土遺物
　　２　石組み１出土遺物
　　３　井戸１出土遺物
　　４　木棺墓出土遺物
図版１　１　遺跡遠景
　　２　第１次確認調査Ｔ１Ｗ竪穴住居
　　３　第２次確認調査十六夜山古墳内濠埴輪出土状況
図版２　１　第２次確認調査十六夜山古墳二重周濠
　　２　竪穴住居１
図版３　１　竪穴住居２
　　２　土　壙　１
　　３　近世の道
図版４　１　柱穴列15・16ほか
　　２　溝　　11
　　３　溝13～17
　　４　井　戸　１
　　５　井　戸　２
　　６　井戸２底部
　　７　井　戸　３
図版５　１　石組み１
　　２　石組み２
　　３　土　壙　４
　　４　土　壙　５
　　５　土　壙　11
　　６　土壙13底部銅銭出土状況
　　７　木　棺　墓
　　８　集　石　１
図版６　１　竪穴住居２出土土器
　　２　弥生時代の石器・土製品
　　３　十六夜山古墳出土埴輪(1)
図版７　十六夜山古墳出土埴輪(2)
図版８　十六夜山古墳出土埴輪(3)
図版９　１　十六夜山古墳出土須恵器
　　２　古代の遺物
　　３　井戸１出土銅銭
　　４　井戸１出土動物遺体（猫）
図版10　１　井戸２出土遺物
　　２　土壙13出土銅銭
　　３　溝４出土備前焼摺鉢
　　４　集石１出土陶器

# 第１章　遺跡の位置と環境

十六夜山古墳・十六夜山遺跡は、岡山県の北東部、津山市椿高下62に所在する。

津山市は、吉井川を中心とする河川流域に形成された盆地に位置し、北には中国山地が連なり、南には吉備高原が広がる。岡山県東部を北から南へ貫いて流れる吉井川は、この津山盆地で東西方向に大きく向きを変え、その流域および吉井川に注ぐ諸河川の流域にいくつもの小盆地を形成し、それらが東西に連なるように展開している。このような地理的環境から、河川や盆地によって美作地域を東西につなぎ、また主として舟運による県南部方面との交通においても重要な位置を占めていることがわかる。当遺跡が所在するのは、これら東西に連なる盆地群のほぼ中央部、吉井川と宮川との合流地点付近である。吉井川の北岸に、宮川に沿って南北に細長い盆地を形成しており、東西には丘陵がせまっている。その丘陵からは幾筋もの低い舌状の尾根が盆地に向かって張り出し、その尾根上を中心に古くからの人々の生活の痕跡がうかがえる。

津山盆地周辺における人々の生活を示す最も古い時期の資料としては、天神原遺跡出土のナイフ形石器[1]が挙げられる。旧石器時代にまでさかのぼるものであるが、同時代のものは他に知られていない。縄文時代では、津山市街地の北側に位置する大田西奥田遺跡において縄文早期の竪穴住居が発見されており[2]、注目される。また、大田茶屋遺跡では縄文晩期の土壙数基が確認されている[3]。そのほかにも縄文土器の出土地が知られているが、その数は多くない。

弥生時代には多くの遺跡がみられ、宮川流域の盆地を見おろす低丘陵上にも点々と集落が形成されていくようである。前期の遺跡はそれほど多くないが、山北一丁田遺跡[4]や京免遺跡[5]などがある。中期に入ると遺跡数は増加し、中期後半～後期には非常に多くの遺跡がみられるようになる。中期の沼遺跡[6]、後期の大田十二社遺跡[7]、京免遺跡などが著名である。京免遺跡は宮川沿いの低位部に所在するが、環濠をもつ集落のようである。弥生時代の集落遺跡以外では、墳墓遺跡が知られている。土壙墓・木棺墓群等の小規模な墓地は各集落遺跡に近接して営まれるものも多いが、首長墓とみられる墳墓が、当盆地の北西、神楽尾山から派生する丘陵上に確認されている。下道山遺跡では、２基の方形台状墓のほか120基を超える土壙墓群が検出されている[8]。

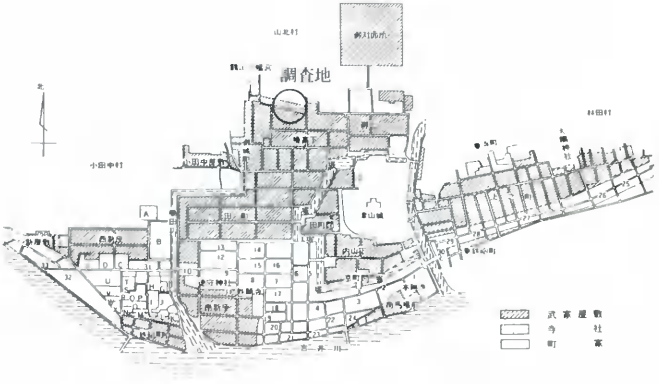
古墳時代に入ると、周辺各地で大規模前方後円墳をはじめとする多数の古墳が築かれる。前期古墳では、日上天王山古墳[9]、美和山１号墳[10]などの大規模前方後円墳があるが、それらは津山の中心部を挟んで東西に所在する。古墳時代中期の前半においては、河面丸山１号墳[11]などの中・大規模方墳が点在し、

第１図　調査位置図

● 古墳　——-—— 古墳群　■ 弥生集落・墳墓など

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 十六夜山古墳・十六夜山遺跡（調査地点） | 2 | 美作国府跡 | 3 | 山北一丁田遺跡 | 4 | 高橋谷遺跡 |
| 5 | 二宮大成遺跡 | 6 | 二宮大成古墳 | 7 | 小田中狐塚古墳 | 8 | 権現山遺跡 |
| 9 | 下道山遺跡 | 10 | 大平遺跡 | 11 | 下道山南古墳 | 12 | 丸山１号・２号墳 |
| 13 | 総社内山遺跡 | 14 | 京免遺跡 | 15 | 竹ノ下遺跡 | 16～20 | 沼遺跡群 |
| 21 | 沼古墳群 | 22 | 野介代遺跡 | 23 | 林田東谷古墳 | 24 | 八出砦山遺跡 |
| 25 | 桃山遺跡 | | | | | | |

**第２図　周辺の遺跡分布図（1/25,000）**




**第３図　津山城下町図**

十六夜山古墳の周辺では短甲形埴輪の出土が注目される下道山南古墳[12]がある。この時期、前方後円墳が途絶えるようであるが、中期末頃には周濠をたたえる前方後円墳が出現する。十六夜山古墳、日上畝山80号墳[13]、井口車塚古墳[14]などである。後期古墳は津山盆地の各地に築かれているが、横穴式石室をいち早く導入した中宮１号墳[15]や前方後円墳の高野山根１号・２号墳[16]の所在する佐良山地域が注目される。今回の調査地である津山高等学校敷地内においても、南西隅付近でかつて陶棺が出土したことが伝えられ、横穴式石室墳が存在したものと考えられる。津山盆地中心部では、十六夜山古墳以降目立った古墳がみられないが、つづく古代では、調査地から北へ約500ｍの位置に美作国府[17]が造営されており、一躍美作の中心地となったことがうかがえる。

中世になると美作にも守護職が置かれたが、歴代の守護の多くは津山市西部の院庄に居館を構えて国内を支配し、院庄は中世を通じて美作武家勢力の中心地となった。この院庄館跡は一部発掘調査が実施されており、掘立柱建物や井戸、土塁などが検出されている[18]。

室町時代の中頃、美作守護となった山名教清は、その一門の将、山名忠政に命じ、国の中央鶴山に城砦を築かせた。これが津山城の起源である。応仁の乱後、山名氏の退去によって廃城となったが、近世に入り、美作18万6,500石を領して入国した森忠政は、山名氏の旧塁の跡に津山城を築城した。それと同時に城下町の建設にも着手し、現在の津山市街の基礎を形成した（第３図）。　　（尾上）

**註**

(1)　河本　清ほか「天神原遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』４　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７　1975

(2)　岡本寛久「縄文時代早期の竪穴住居跡の発掘」『所報吉備』第15号　1993

(3)　岡本寛久『大田茶屋遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告96　1994

(4)(6)　近藤義郎・渋谷泰彦編『津山弥生住居址群の研究－西地区－』津山郷土館考古学研究報告第２冊　1957

(5)　中山俊紀『京免・竹ノ下遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集　1982

(7)　中山俊紀ほか『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集　1981

(8)(12)　栗野克己・岡本寛久『下道山遺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17　1977

(9)　近藤義郎・倉林眞砂斗・澤田秀実編『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集　1997

(10)　中山俊紀『史跡美和山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集　1992

(11)　土居　徹・河本　清「美作の方墳」『古代吉備』第７集　1971
　今井　堯「原始から古代国家の成立」『津山市史』第１巻　原始・古代　1972

(13)　河本　清「日上畝山古墳群」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986

(14)　小郷利幸『井口車塚古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集　1994

(15)(16)　近藤義郎編『佐良山古墳群の研究』第１冊　1952

(17)　岡山県教育委員会「美作国府」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』３　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６　1973
　安川豊史『美作国府跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集　1984
　安川豊史『美作国府発掘調査概報』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第40集　1991
　安川豊史編『美作国府跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集　1994

(18)　河本　清『史跡院庄館跡発掘調査報告書』津山市教育委員会　1974
　行田裕美『史跡院庄館跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第７集　1981

# 第２章　発掘調査の経緯と経過

## 第１節　調査にいたる経緯

県立津山高等学校の校舎は、約40年前の建築で老朽化が目立ち、校舎の改築と新たな教育施設の増設整備が懸案となっていた。平成元年頃から改築の動きが始まり、創立百周年に向けて準備がすすめられた。調査、検討を経て、平成４年度には、平成７年度工事着工をめざす具体的な計画が決まった。このような計画の中で、1900（明治33）年創立当初の建築である本館と、校内に残丘が存在する十六夜山古墳は津山高等学校のシンボルとして残す方針が決まっていたが、十六夜山古墳の墳形や範囲については不明な点が多く、一部新校舎と重なる恐れもあった。また近世の武家屋敷跡をはじめとする遺跡の広がりも想定され、協議の結果、十六夜山古墳の正確な範囲確認およびその他の遺跡の確認を目的とした調査を実施することになった（第１次確認調査）。また翌年には新校舎建設に伴って必要となる仮校舎の基礎部分について、確認調査を実施した（第２次確認調査）。

これらの確認調査の結果、十六夜山古墳は、前方部を完全に削平された墳長約60ｍを測る前方後円墳であることが判明した。その範囲もほぼ明らかになり、残存状況が悪いながら前方部の周濠の一部が新校舎と重なる可能性が出てきた。ほかに弥生時代や近世の遺跡の広がりも確認され、協議の結果、新校舎建設区域の全面を対象とする発掘調査を行うことになった。

なお、当初全面調査の対象としていた新校舎の北辺部については、地形が急に下がる北向き斜面であり、また旧校舎の地下室による破壊を受けている部分が多かったため、全面調査の対象から外し、平成８年度、工事の立会を行っている。この部分に遺構は認められなかった。　（尾上）

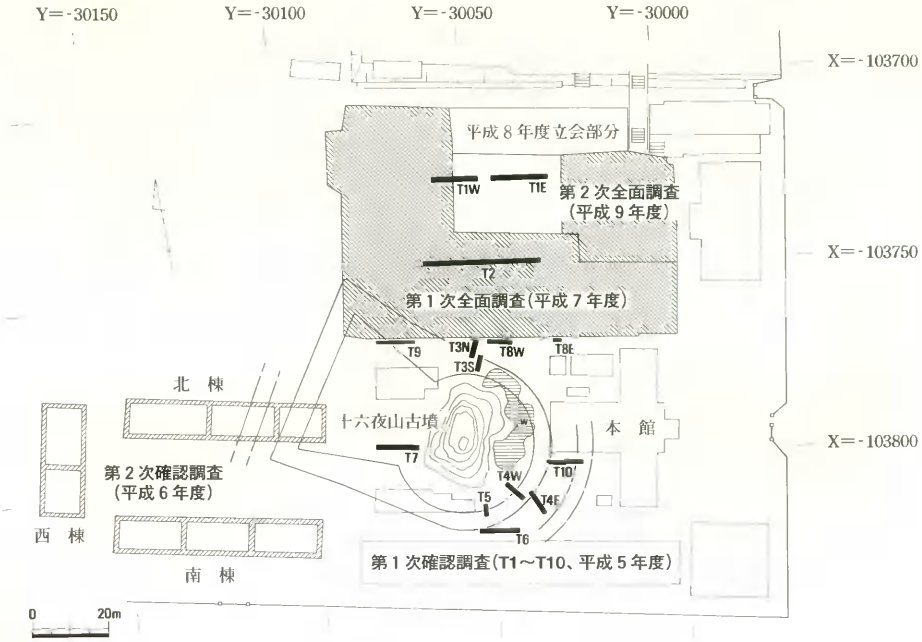
## 第２節　発掘調査・報告書作成の経過

### １．第１次確認調査の経過

第１次確認調査は、平成５年８月２日から８月23日の期間に行った。Ｔ１からＴ10のトレンチを設定したが、既存の構造物を避けるため、Ｔ１・Ｔ３・Ｔ４・Ｔ８については２か所に分割して設定している（第４図）。Ｔ１・Ｔ２は校舎北半部における遺跡の広がりの確認、Ｔ３～Ｔ10は十六夜山古墳の墳形、範囲確認を主な目的としている。調査はＴ１・Ｔ２を先行して行った。調査にあたっては、高台にもかかわらず湧水が多く難航したが、ほぼ当初の目的を達し調査を終了した。　（尾上）

### ２．第２次確認調査の経過

第２次確認調査は、平成６年10月３日から11月１日の期間に行った。仮校舎の基礎部分300㎡についての確認調査であり、十六夜山古墳西方のグランドに計３棟が建設される計画であった（第４図）。一時的な建造物であり、建築に伴う掘削が現地表から50～60㎝にとどまることから、それ以上の深さの調査は基本的には行っていない。調査は遺構のほとんどない南棟、西棟を先行して行った。北棟においては、十六夜山古墳の周濠が検出され前方後円墳であることが判明するなど予想以上の多くの成果が得られたが、調査は順調にすすめることができ、予定通り調査を終了した。　（尾上）




**第４図　調査区配置図（1/1,500）**

## ３．第１次全面調査の経過

第１次全面調査は、平成７年９月１日から同年12月15日の期間に行った。調査は前回までの確認調査の成果を受け、校舎改築（第１期工事）により影響を受ける2,920㎡を対象として行った（第４図）。調査区は旧校舎の土台部分や水道やガスの配管等によりかなりの箇所が破壊されており、実際に調査できたのは全体の約６割から７割程度であった。しかしながら、調査の結果、弥生時代から近・現代にいたる遺構が確認され、これに伴う遺物が多く発見された。検出した遺構は、弥生時代の竪穴住居、十六夜山古墳の周濠、江戸時代の城下町の一部、学校創設から現在にいたる津山高校に関連する施設の大きく４つに整理できる。弥生時代の竪穴住居は１軒のみの検出であったが、十六夜山古墳の存在する、東方にのびる尾根上に弥生時代の集落の存在することが確

**第５図　現地説明会風景**

認できた。また、本書には収載しなかったが、津山高校に関連する施設として、津山高校本館の背後に存在した庭園遺構の一部が検出されるなど、記録にみられない遺構が見つかった。なかでも十六夜山古墳の周濠の検出は、確認調査の成果とあわせ、十六夜山古墳が全長60ｍの前方後円墳で、美作地方では最大級の規模であることを裏付けるものとなった。また、周濠内からは多くの埴輪片が検出された。さらに江戸時代の遺構としては、津山城下町の道および武家屋敷の一部が検出された。特に井戸１からは多くの陶磁器をはじめ金属製品などが出土した。これらの遺構は、津山城下町の数少ない発掘調査例として注目された。調査は雨天等で調査できない日もあったが、予定どおりに終了した。これらの発掘調査成果は、平成７年12月10日に行われた現地説明会で一般に公開され、約160名の参加を得た。また、津山高校の日本史の授業の一環として、生徒による遺跡見学も随時行った。さらに、平成７年12月15日に行われた専門委員会では、遺跡全般にわたり重要な助言を得るとともに、周濠部分については、その位置を新校舎に表示することが決まった（第４節参照）。　（金田）

## ４．第２次全面調査・報告書作成の経過

第２次全面調査は、平成９年４月１日から５月30日の期間に行った。新校舎予定部分の北東隅付近710㎡を対象として調査した。調査地点は北向き斜面のやや低くなる位置にあたるため、あまり遺構は多くないと当初予想していたが、近世を中心に多数の遺構が検出された。発掘調査は近世の遺構が密に存在する南側から順次すすめていった。弥生時代の遺構は調査区北半部に認められた。やや低い位置にあるため、かえって後世の削平を免れたようでり、大形の竪穴住居などを検出している。なお、調査区北東隅付近（竪穴住居２の一部と井戸３）については、安全上の理由からこの段階に調査することができず、工事着手直前の11月に補足調査として実施した。

悪天候で作業のできない日も多かったが、調査は順調に進み、予定通り終了することができた。

発掘調査終了後ただちに、報告書作成作業に入った。平成９年６月から11月までの６か月間である。遺物の洗浄と注記作業は発掘調査と並行して行い終了していたため、遺物については接合・復元作業から開始した。十六夜山古墳出土の埴輪が中心となったが、７月中にほぼ終了し、８～９月で遺物の実測作業を行った。それらと並行して遺構・遺物のトレース作業、遺物写真撮影を行い、10月にほぼ終了、11月には文章の執筆を中心に行い、すべての作業を終了した。　（尾上）

## ５．発掘調査日誌抄

**第１次確認調査（平成５年度）**

８月２日　調査開始
８月９日　Ｔ１・Ｔ２調査終了
８月23日　Ｔ３～Ｔ10調査終了

**第２次確認調査（平成６年度）**

10月３日　調査開始
10月５日　十六夜山古墳周濠検出
11月１日　調査終了

**第１次全面調査（平成７年度）**

９月１日　調査開始
10月20日　近世の遺構検出終了
11月15日　十六夜山古墳周濠検出
12月10日　現地説明会開催
12月15日　埋蔵文化財専門委員会開催、調査終了

**第２次全面調査（平成９年度）**

４月１日　調査準備開始
４月７日　調査開始
５月19日　遺構検出終了
５月30日　調査終了
11月11日～19日　補足調査実施

# 第３節　発掘調査・報告書作成の体制

**平成５年度発掘調査（第１次確認調査）体制**

岡山県教育委員会
- 教育長　森崎岩之助
- 教育次長　岸本　憲二

文化課
- 課長　渡邊　淳平
- 課長代理　松井　新一
- 課長補佐(埋蔵文化財係長)　高畑　知功
- 主査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター
- 所長　横山　常實
- 次長　葛原　克人
- 総務課長　北原　求
- 課長補佐(総務係長)　小西　親男
- 主査　石井　茂
- 主査　石井　善晴
- 主任　三宅　秀吉
- 調査第一課長　正岡　睦夫
- 課長補佐(第一係長)　松本　和男
- 文化財保護主査　桑田　俊明(調査担当)
- 文化財保護主事　宇垣　匡雅(調査担当)

**平成６年度発掘調査（第２次確認調査）体制**

岡山県教育委員会
- 教育長　森崎岩之助
- 教育次長　岸本　憲二

文化課
- 課長　大場　淳
- 課長代理　松井　新一
- 課長補佐(埋蔵文化財係長)　高畑　知功
- 主任　若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター
- 所長　河本　清
- 次長　葛原　克人
- 総務課長　丸尾　洋幸
- 課長補佐(総務係長)　杉田　卓美
- 主査　石井　善晴
- 主任　三宅　秀吉
- 調査第一課長　正岡　睦夫
- 課長補佐(第一係長)　松本　和男
- 文化財保護主事　植月　康雅(調査担当)
- 主事　尾上　元規(調査担当)

**平成７年度発掘調査（第１次全面調査）体制**

岡山県教育委員会
- 教育長　森崎岩之助
- 教育次長　黒瀬　定生

文化課
- 課長　大場　淳
- 課長代理　樋本　俊二
- 参事　葛原　克人
- 課長補佐(埋蔵文化財係長)　高畑　知功
- 主任　若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター
- 所長　河本　清
- 次長　高塚　惠明
- 次長　葛原　克人(文化課本務)
- 総務課長　丸尾　洋幸
- 課長補佐(総務係長)　井戸　丈二
- 主査　石井　善晴
- 主任　木山　伸一
- 調査第二課長　伊藤　晃
- 課長補佐(第一係長)　井上　弘
- 文化財保護主査　木原　義明(調査担当)
- 文化財保護主任　延堂　守(調査担当)
- 主事　樋口　雅夫(調査担当)
- 主事　金田　善敬(調査担当)

**平成９年度発掘調査（第２次全面調査）・報告書作成体制**

岡山県教育委員会

| | |
|---|---|
| 教育長 | 黒瀬　定生 |
| 教育次長 | 平岩　武 |
| 文化課 | |
| 課長 | 髙田　朋香 |
| 課長代理 | 西山　猛 |
| 参事 | 葛原　克人 |
| 課長補佐(埋蔵文化財係長) | 平井　勝 |
| 文化財保護主任 | 大橋　雅也 |

岡山県古代吉備文化財センター

| | |
|---|---|
| 所長 | 籔本　克之 |
| 次長 | 正岡　睦夫 |
| 総務課長 | 小倉　昇 |
| 課長補佐(総務係長) | 井戸　丈二 |
| 主査 | 木山　伸一 |
| 調査第三課長 | 柳瀬　昭彦 |
| 課長補佐(第二係長) | 井上　弘(調査担当) |
| 文化財保護主査 | 木原　義明(調査担当) |
| 文化財保護主事 | 尾上　元規(調査・報告担当) |

## 第４節　調査後の整備（十六夜山古墳）

今回の調査によって、十六夜山古墳が大規模前方後円墳であるとの重要な結果が得られたため、新校舎建築後も現地でそれがわかるように整備し、活用していくことが望まれた。協議の結果、第１次全面調査の成果に基づき、十六夜山古墳の範囲と新校舎とが重なる部分について、墳端および周濠外端の位置を、新校舎に表示することとなった。

**第６図　新校舎における十六夜山古墳周濠位置の表示**

第６図のようにセメントの廊下にはタイルを埋め込み、また教室内床面にも細いラインを埋め込んで表示している。なお、後円部残丘をはじめとするその他の部分については、現状保存される。（尾上）

調査中および報告書作成段階において、下記の方々より重要な指摘、教示をいただいた。記して謝意を表する次第である（敬称略、五十音順）。

赤木和郎　小栗明彦　小郷利幸　亀田修一　坂本心平　妹尾　護　富岡直人　中山俊紀　野崎貴博　平岡正宏　古市秀治　松木武彦　宗森英之　安川豊史　行田裕美

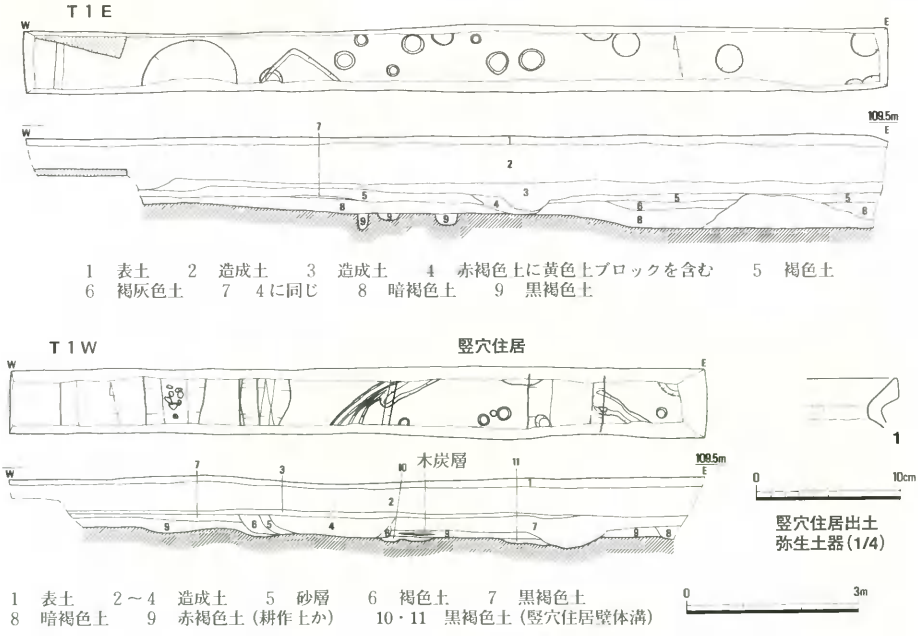
# 第３章　確認調査の概要

## 第１節　第１次確認調査の概要

各トレンチは地山まで掘削して調査したが、地山面は北方および東方にいくほど下がっており、近世以降の造成が厚くなされている。近世武家屋敷や学校建設に伴う造成と考えられる。

十六夜山古墳の周濠を確認することができたのはＴ４・Ｔ９・Ｔ10である。Ｔ９では痕跡程度に確認されたのみであるが、Ｔ４・Ｔ10では周濠の輪郭をおさえることができた。Ｔ10ではトレンチの両端に周濠が確認され、調査時点では十六夜山古墳の東側に別の古墳が存在する可能性を考えたが、第２次確認調査において検出された前方部側の二重周濠の状況を考えると、東側の周濠は十六夜山古墳の外濠に相当する可能性が高い。なお周濠内からは多数の埴輪片が出土しているが、これらについては全面調査時出土のものと一括して第22～29図に掲載している。第１次確認調査では十六夜山古墳の墳形および規模を確定することはできなかったが、径45ｍ程度の円墳、あるいは残丘北側のＴ３や西側のＴ７で周濠が確認されていないことから、帆立貝形古墳か前方後円墳の可能性も考えられた。

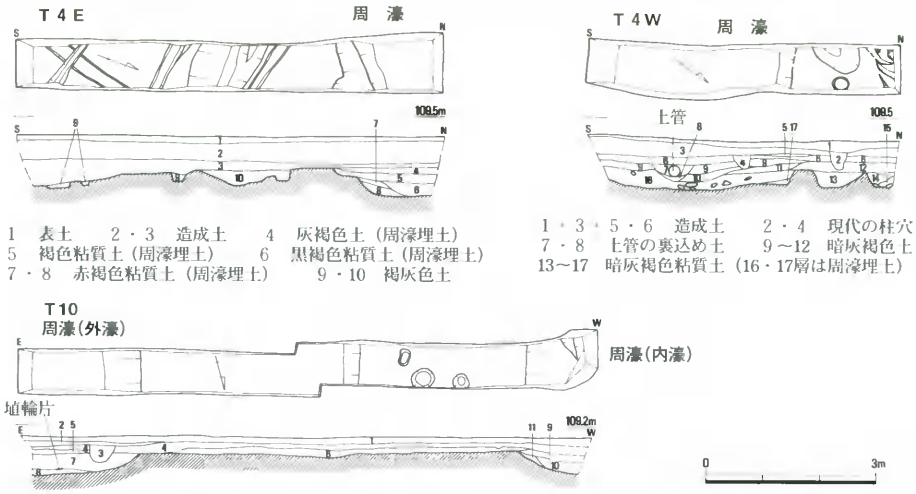
古墳以外の遺構としては、Ｔ１Ｗ検出の竪穴住居がある。残存状況は悪く、壁体溝のみが検出された。直径は７～８ｍ程度に復元され、わずかながら出土した弥生土器片より弥生時代後期後半頃のものと推定される。そのほか、各トレンチにおいて溝、土壙、ピットなどが検出されているが時期の不明なものが多く、近・現代のものも多いと思われる。　（尾上）




１　表土　２　造成土　３　造成土　４　赤褐色土に黄色土ブロックを含む　５　褐色土
６　褐灰色土　７　４に同じ　８　暗褐色土　９　黒褐色土

１　表土　２～４　造成土　５　砂層　６　褐色土　７　黒褐色土
８　暗褐色土　９　赤褐色土（耕作土か）　10・11　黒褐色土（竪穴住居壁体溝）

**第７図　Ｔ１Ｅ・Ｗおよび出土遺物（1/100、1/4）**




1　表土　　2・3　造成土　　4　灰褐色土（周濠埋土）
5　褐色粘質土（周濠埋土）　　6　黒褐色粘質土（周濠埋土）
7・8　赤褐色粘質土（周濠埋土）　　9・10　褐灰色土

1・3・5・6　造成土　　2・4　現代の柱穴
7・8　上管の裏込め土　　9～12　暗灰褐色土
13～17　暗灰褐色粘質土（16・17層は周濠埋土）

1・2・4～6　造成土　　3　近・現代の柱穴　　7　暗灰褐色粘質土（外濠埋土）
8　黒褐色粘質土（外濠埋土）　　9・10　暗灰褐色粘質土（内濠埋土）　　11　黄褐色粘質土（地山の変質土か）

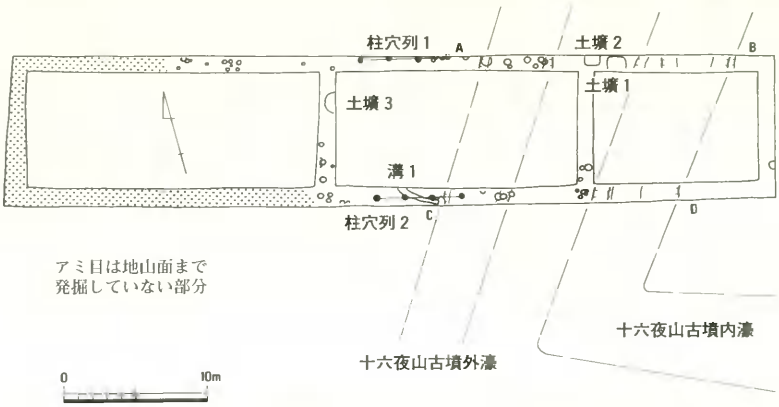
**第８図　Ｔ４Ｅ・Ｗ・Ｔ10（1/100）**

## 第２節　第２次確認調査の概要

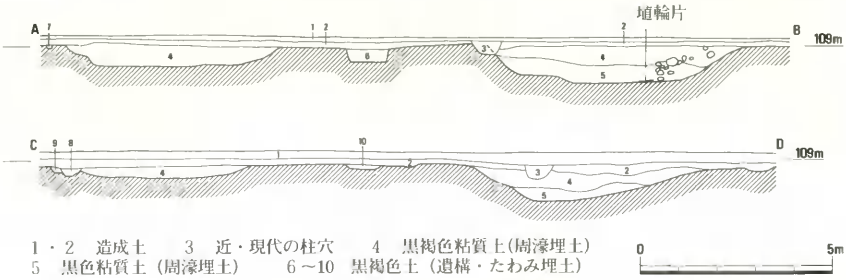
プレハブ仮校舎３棟の基礎部分についての調査である（第４図）。仮校舎基礎の達する地表から50～60㎝の掘削で地山に到達したのは北棟および西棟の北部のみである。原地形が南に向かって下がっている状況がうかがえる。遺構が主として検出されたのは北棟部分である（第９図）。西棟北部ではピット数基が検出されたにすぎない。これらの遺構の検出された部分では約30㎝程度の造成土を除去するとすぐに地山が検出される。それ以外の部分では多量の近世以降の陶磁器類や瓦を含む造成土が厚く認められる。

検出された遺構のうち最も注目されるのは十六夜山古墳の周濠である。南北方向に２条の周濠が平行して直線的に検出された。これにより、十六夜山古墳が前方後円墳であり、少なくとも前方部前端において二重の周濠を伴っていることが明らかになった。現状での周濠の規模は、内濠で幅約６ｍ、深さ約１ｍ、外濠で幅約4.5～5.5ｍ、深さ約30～60㎝で、外濠の方がやや規模が小さい。また、内濠、外濠ともに前方部コーナーに近い南側の方が浅くなっている。周濠内からは埴輪と須恵器が多数出土したが、外濠ではやや量が少ない。これらの埴輪・須恵器については全面調査時出土のものと一括して第22～31図に掲載している。また内濠の東側（墳丘側）に偏って、葺石の転落と考えられる拳大ないし人頭大の川原石が多数検出された（第10図参照）。なお、周濠内上層からは古代の遺物も出土している（第32図－66・67・72など）。

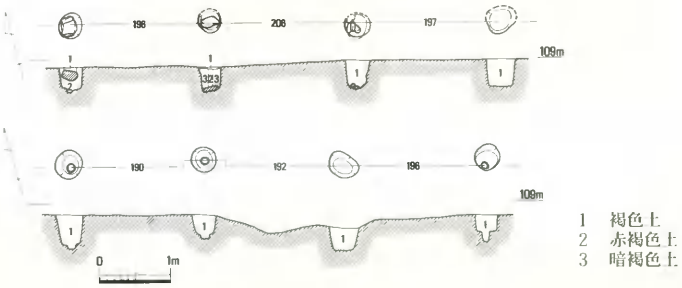
そのほかの主な遺構としては、溝、柱穴列、土壙などがある（第９図）。溝１は、緩やかに弧を描く細く浅い溝であり、古墳の周濠に切られていることや弥生土器小片が出土していることから弥生時代の遺構と考えられ、竪穴住居の壁体溝の可能性がある。柱穴列１・２（第11図）は、いずれもほぼ東西方向を示す柱穴列であり、柱穴内より勝間田焼の小片が出土しており近世の遺物を含まないこと




第９図　仮校舎北棟部分遺構配置図（1/400）




第10図　十六夜山古墳周濠部分断面図（1/150）




第11図　柱穴列１（上）・２（下）（1/80）

から、中世のものと考えられる。柱間距離は２ｍ前後、柱穴列１には柱穴内に礎石がみられる。建物の一部である可能性が高いが、部分的な調査のため詳細は不明である。土壙１・２は、一辺１ｍ強の方形を呈するもので、深さは現状で30㎝程度である。内部には多量の拳大礫や瓦、陶磁器などが投げ込まれた状況であり、出土遺物から幕末期以降のものと考えられる。土壙３は完掘していないが、径１ｍ強の井戸状を呈するものである。埋土は橙色の砂質土で、人為的に埋め戻された状況を呈する。遺物は出土していないが、近世の素掘り井戸の可能性がある。　（尾上）

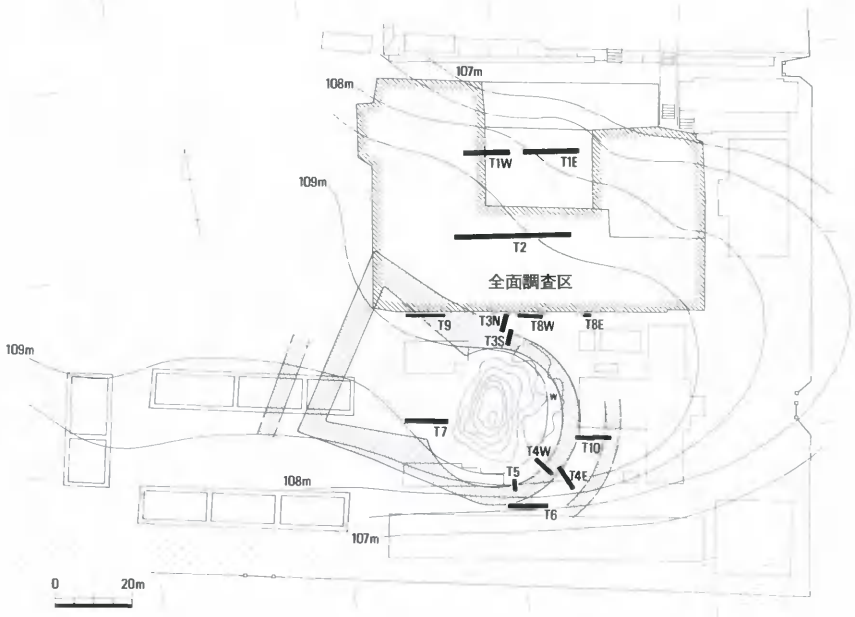
# 第４章　全面調査の概要

## 第１節　調査地点の概要

調査地である県立津山高等学校の敷地内は、現在は平坦な地形であるが、これは近世以降現代にいたる度重なる造成の結果であり、現状ではもとの地形を推定しにくくなっている。そこで第12図では、発掘調査や工事立会の際の地山検出レベルを手がかりに原地形の復元を試みた。これによると、遺跡は北西から東に向かってのびる尾根上に位置していることがわかる。また十六夜山古墳は、尾根線に平行し、地形の高い北西側に前方部を向けて築かれている。

全面調査の対象となったのは、この尾根の北半部分であり、北東に向かって下がる緩斜面にあたる。近世以降の改変によって、南側は削平、北側は埋め立てて造成されている。造成土は何層にもわたり、おそらく津山城下町の建設時（近世初期）に形成されたものも含んでいると考えられる。近世の遺構調査にあたっては、当時の造成面を見極め、その面で遺構検出、調査を行うべきであるが、各造成土の形成時期は必ずしも明確にし得ず、造成土と近世の遺構埋土の区別も困難であった。したがって、遺構検出は基本的には地山面で行っており、場合によっては遺構の上部が調査できていない可能性もある。しかしながら、近世の遺構の検出状況から考えて、近世段階にそれほど大幅な造成は行われていなかったと考えている。

全面調査で検出された遺構は、弥生時代、古墳時代（十六夜山古墳のみ）、近世の３時期のものがあり、遺構は認められなかったが、古代の遺物も出土している。（尾上）

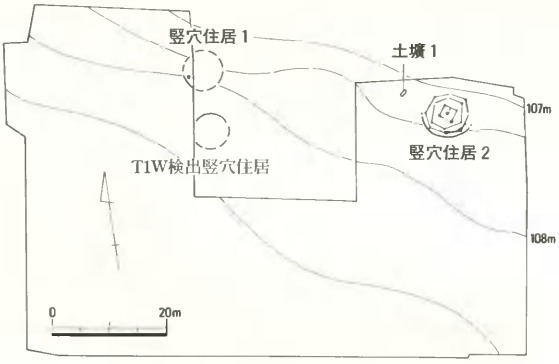



第12図　十六夜山遺跡地形復元図（1/1,500）

# 第２節　弥生時代の遺構と遺物

## １．概　略

竪穴住居２軒（確認調査Ｔ１Ｗ検出のものを含めると３軒）、土壙１基が検出されている。いずれも北向き斜面のやや下がった位置にあるが、地形の高い南側については削平を受けて消滅していると考えられる。そのほか、ピットがいくらか検出されている。（尾上）

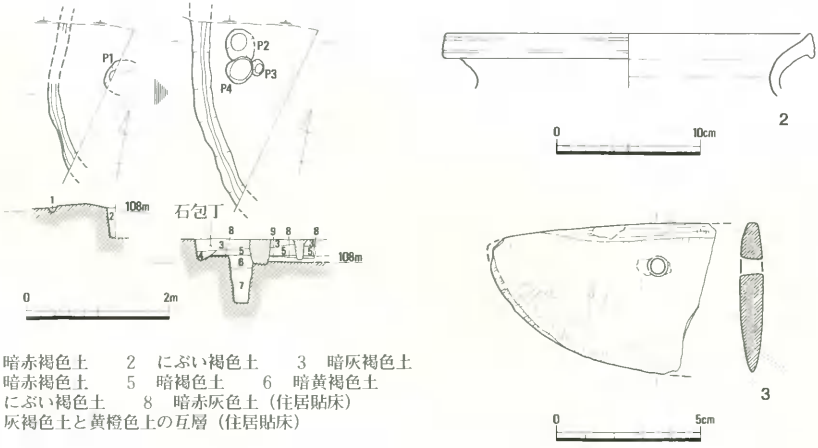



第13図　弥生時代の遺構配置図（1/1,000）

## ２．竪穴住居

### 竪穴住居１（第14図）

調査区の北半部で検出した竪穴住居である。竪穴住居の東部は調査区外に位置するため、調査を行っていない。また、竪穴住居の北部は校舎の基礎部分で破壊されていた。調査の結果、竪穴住居内から同心円状に２条の壁体溝が検出された。土層断面の観察から、２条の壁体溝のうち、内側のものが古く、外側のものが新しいことがわかった。このことから、竪穴住居は少なくとも２回の建て直しが行われたものと推定される。古い段階の住居から検出できた遺物はわずかであった。新しい段階の住居では、灰褐色土と黄橙色土が互層状に薄く堆積している貼床を検出した。この竪穴住居に伴う遺物として、弥生土器片および石器があげられる。２は弥生土器甕の口縁部である。表面は磨耗している。３は石包丁の破片である。円孔が施されており、頁岩製である。竪穴住居の時期はこれらの遺物より弥生時代後期と推測される。（金田）

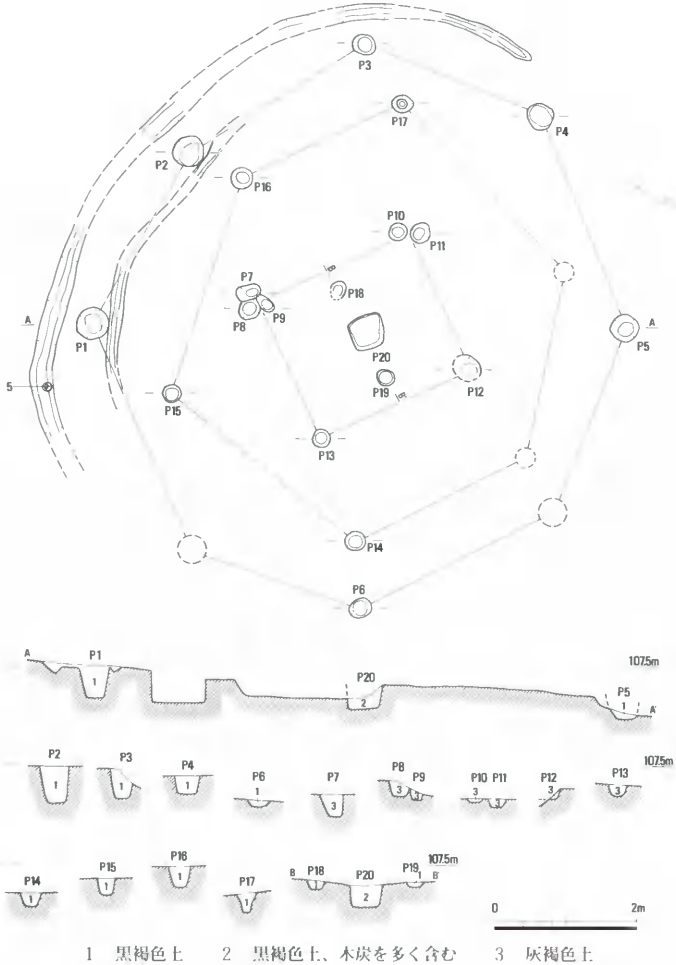



1　暗赤褐色土　　2　にぶい褐色土　　3　暗灰褐色土
4　暗赤褐色土　　5　暗褐色土　　6　暗黄褐色土
7　にぶい褐色土　　8　暗赤灰色土（住居貼床）
9　灰褐色土と黄橙色土の互層（住居貼床）

第14図　竪穴住居１および出土遺物（1/80、1/4、1/2）

**竪穴住居２（第15・16図）**

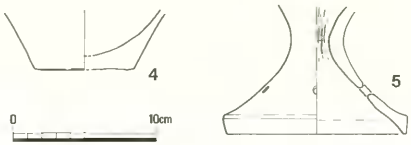
調査区北東隅に検出された平面円形の竪穴住居である。残存状況が悪く、壁体溝の一部と柱穴、中央穴が残存している程度である。住居の平面形は、等高線ののびる方向に対してやや長い楕円形を呈し、地形の制約を受けているものと思われる。壁体溝は同心円状に２条認められ、住居の建て替えを行っていることがわかる。住居の規模は、外側の壁体溝で長径約９ｍ、内側の壁体溝で長径約7.5ｍと推定される大形のものである。主柱穴は、検出できなかった部分もあるが、外側の壁体溝に伴うものが８本（Ｐ１～６）、内側の壁体溝に伴うものが６本（Ｐ14～17）と推定される。また、中央穴の周囲には方形に４本配置される柱穴（Ｐ７～13）と、中央穴を挟んで２本一対のもの（Ｐ18・19）が認められる。前者が８本柱との共存、後者が６本柱との共存と推定することも可能であろう。中央穴は一辺50㎝程度の方形を呈し、深さは復元で50～60㎝あり、埋土には多量の木炭が含まれていた。




１　黒褐色土　　２　黒褐色土、木炭を多く含む　　３　灰褐色土

**第15図　竪穴住居２（1/80）**

遺物は、弥生土器が少量出土している（第16図）。４はＰ２出土の甕の底部である。橙色を呈し、底面から側面にかけて黒斑が認められる。５は壁体溝出土の小形器台で、黄橙色を呈する。これらの遺物から、弥生時代後期後半の年代が与えられる。（尾上）

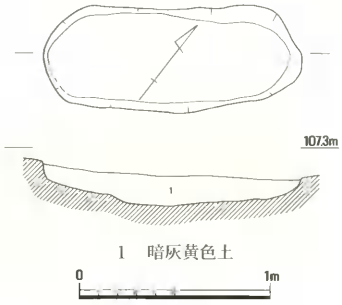



**第16図　竪穴住居２出土遺物（1/4）**

## ３．土　壙

**土壙１**（第17図）

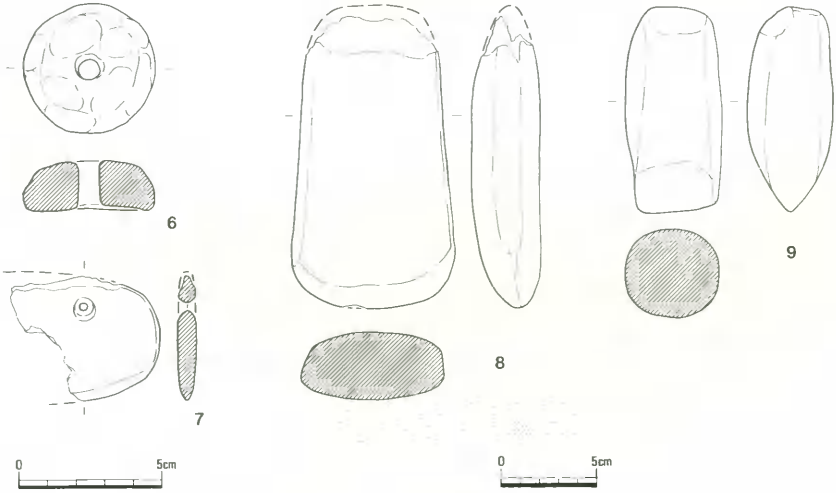
竪穴住居２の近くに検出された土壙である。隅丸方形ないし楕円形を呈するもので、等高線に直交する方向を示す。長さ135㎝、幅55㎝、深さ15～20㎝を測る。遺物は出土していないが、埋土の色調等から弥生時代のものと判断した。形態、規模などから土壙墓の可能性が考えられる。（尾上）




**第17図　土壙１（1/30）**

## ４．遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物のうち弥生時代に属すると考えられるものを第18図に示した。６は土製紡錘車であるが、古墳時代のものかもしれない。焼成良好でにぶい橙色を呈する。７は頁岩製の磨製石包丁で、風化が激しく緑灰色を呈する。両面からの穿孔がなされている。８は砂岩製のやや扁平な磨製石斧で、刃部はやや片刃状をなし、摩滅によって丸みを帯びている。側面は丁寧に磨かれ平滑な面をなす。基部の欠損は新しく、使用によるものではない。９は、風化の著しい流紋岩製の磨製石斧である。やや不整形な円筒状をなし、刃部は鋭く作り出されている。（尾上）




**第18図　遺構に伴わない弥生時代の遺物（1/2、1/3）**

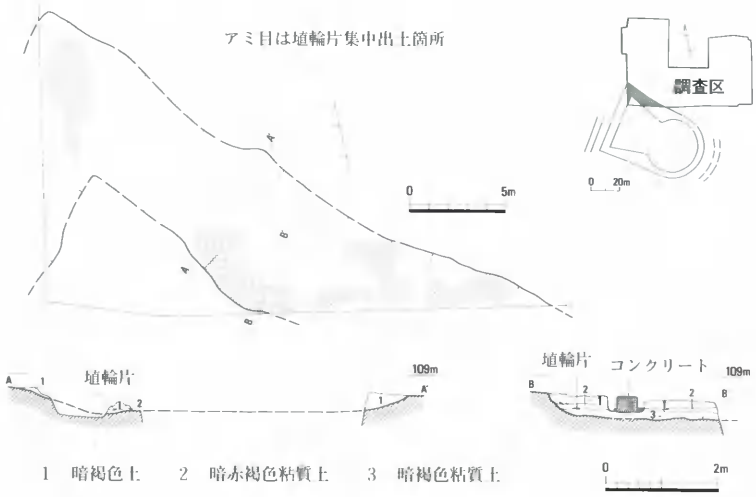
# 第３節　十六夜山古墳

## １．古墳の現状

十六夜山古墳は、現在、県立津山高等学校敷地内に後円部の残丘のみを残しており、今回の調査で前方後円墳であることが確かめられるまでは大規模な円墳として認識されていた。後円部自体も四方からかなり削り込まれており、現状の残丘をみるかぎり、墳形や規模を把握することは困難である。また、後円部残丘の最高所近く、樹木の幹の下に、その根に抱きかかえられるようにして石室とみられる石積みが一部露出している。その構造や規模等は不明であるが、内部主体としておそらく竪穴式石室をもっているものと想定される。（尾上）

## ２．周濠の検出状況（第19図）

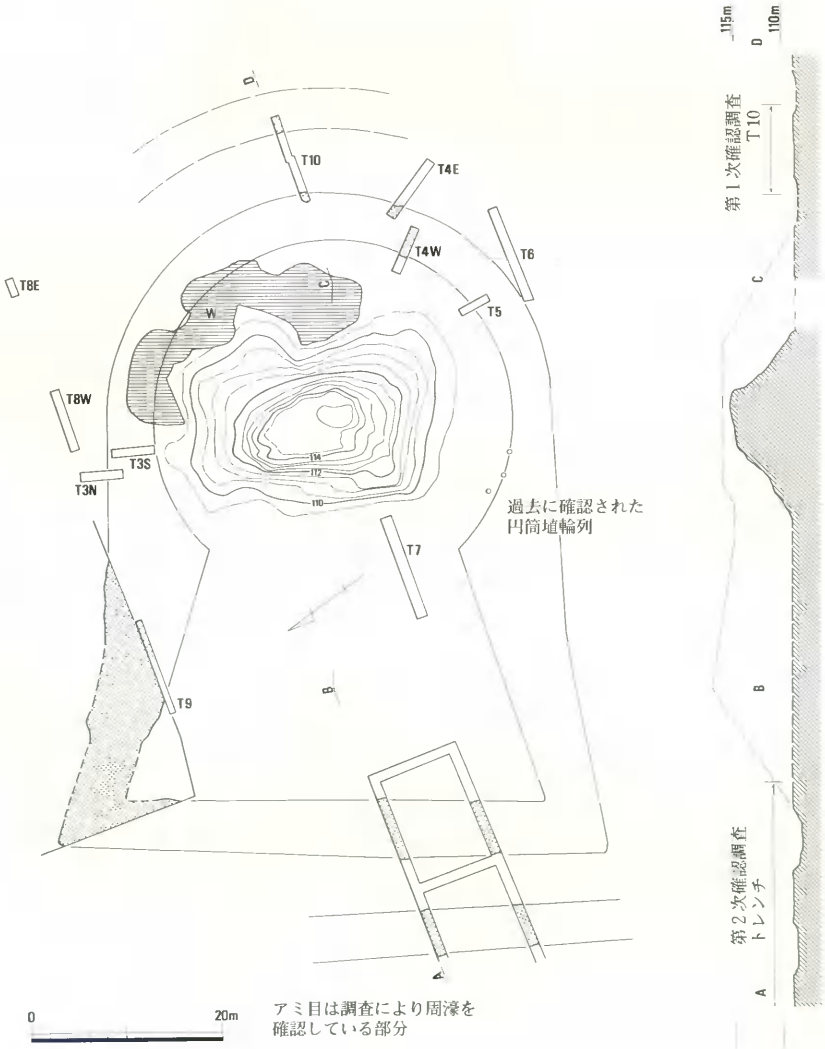
調査区の南西部で十六夜山古墳の周濠を検出した。周濠は調査区南西端部で南西方向に折れ曲がり、その検出範囲から前方部北辺をめぐる周濠（内濠）と考えられる。周濠は、その大部分が旧校舎の基礎などで破壊されていたが、部分的に良好な状態で検出された。周濠内には非常に粘性の強い土が堆積していたことから、水がたまっていたものと考えられる。周濠は深いところで約80cmほど残っており、幅は周濠の両端が検出された箇所で約6.8ｍを測る。周濠内からは埴輪片が多く出土したが、いずれも墳丘から転落したものである。埴輪片は周濠内の南半部（墳丘より）で多く出土する傾向にあるが、北半部においても埴輪片が検出されたことから、埴輪は墳丘本体のほかに内濠の外周にも配置されていた可能性が否定できない。全面調査区内では、第２次確認調査で発見された外濠につづく濠は検出されなかった。外濠は古墳の北側には存在していなかったか、あるいは削平で消滅した可能性がある。また、周濠内から葺石と考えられる石塊も出土した。（金田）




**第19図　十六夜山古墳周濠検出状況（1/300、断面1/100）**

## ３．墳丘の復元（第20図）

十六夜山古墳は検出された周濠の範囲から前方後円墳と推定される。しかし、十六夜山古墳の調査は部分的にしか行われておらず、詳細な復元を得るには、なお問題点を残す。以下、これらの問題点をふまえ、墳丘復元の過程を示す。まず、後円部についてであるが、後円部をめぐる周濠が検出されているのはＴ４Ｅ、Ｔ４Ｗ、Ｔ10のみであり、後円部の南東部に限定される。また、後円部南西付近で過去に円筒埴輪列が確認されているが、その出土位置はおおよそであり、詳細には記録されていない。これらの結果をもとにすると、後円部はおよそ径40ｍに復元できる。また、前方部は、第１次全




**第20図　十六夜山古墳の墳丘復元案（1/600）**

面調査により前方部北辺の周濠および前方部北隅が検出された。また、前方部前端部は第２次確認調査で確認されている。しかし、前方部の南西部および南辺については調査が行われていないため不明である。そのため、墳丘の主軸を明確に設定することができず、前方部前端部の幅も詳細には復元しがたい。以上の問題点をふまえ、十六夜山古墳の推測を含んだ復元数値をあげると、墳長約60ｍ、後円部径約40ｍ、前方部幅約45ｍとなろう。また、十六夜山古墳をめぐる周濠（内濠）は、第１次全面調査で確認された部分において、後円部から前方部前端にいたるにつれて周濠の幅が狭くなる傾向が確認できたことから、いわゆる盾形をしていたものと考えられる。また、外濠は前方部前端部と後円部で確認されているのみである。十六夜山古墳は北西から南東にのびる尾根上に位置していることから、十六夜山古墳の外濠はこの尾根を横切る形でのみ存在していたと考えられるが、後世の削平により消滅した可能性も否定できない。（金田）

## ４．埴　輪

### ａ．円筒埴輪（第21～25図）

出土した埴輪片はコンテナ約40箱分にのぼる。個体別分類の結果、57個体の円筒埴輪を認識することができた。紙面の都合上そのすべてについて図示、解説することはできないので、57個体を対象とした観察により、主要な属性を第21図にまとめている。なお、図示した20個体については観察表を示している（第１表）。以下、全体の傾向と特徴的な個体について記述を行う。

**焼成**（第21図－１）　酸化炎焼成で黄橙色系の色調を示す「軟質」のものと、還元炎焼成で灰色系の色調を示す「硬質」のものがある。両者の厳密な区分は難しいが、両者の比率はおよそ８：２である。なお、朝顔形、形象埴輪も含めて黒斑を有するものは皆無である。

**外面調整**（第21図－２・３）　基本的に一次調整が縦ハケ、二次調整が横ハケであり、二次調整の省略の度合いによって４類型に分類した。ａ類は最下段のみの省略、ｂ類は下から２段分の省略、ｃ類はすべて省略、ｄ類は１個体のみであるが（第24図－23）、１段おきに二次調整を行う。ａ・ｂ類を横ハケ主体、ｃ類を縦ハケ主体の円筒埴輪ととらえると、両者の比率は７：３程度である。

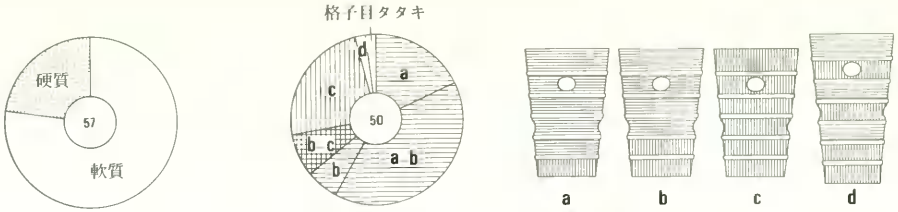
特殊なものとして格子目タタキを施すものがある。第25図－29～34であるが、すべて同一個体と考えられる。古墳時代の須恵器にはみられない目の粗いもので、個々の格子が一辺７～８㎜ある。また二次調整の横ハケの後に格子目タタキを行っていることから、整形や叩き締めのためというより装飾的な意味が強いと考えられる。内面に当て具痕は認められない。

二次調整の横ハケは基本的にすべてＢ種横ハケである。休止痕の傾きによってＢ－１～Ｂ－３に分類したが、右上がりに傾斜するＢ－２類が最も多く約60％を占める。

**口縁形態**（第21図－４）　端部にほぼ水平の面をもつ１類、外方に傾斜した面をもつ２類、端部下に突帯をもつ３類、端部に突帯をもつ４類に分類できる。突帯をもたない１・２類が主体である。

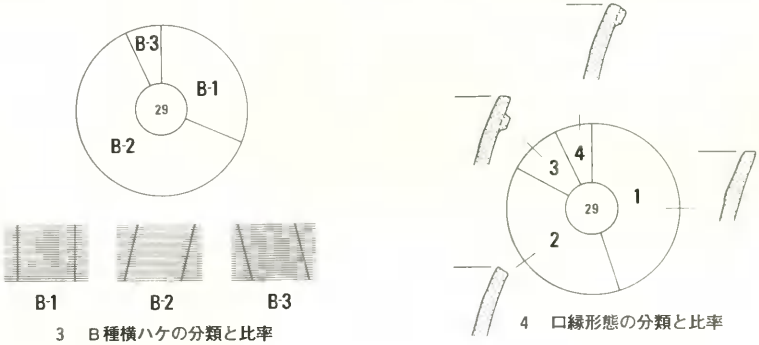
**突帯間距離**（第21図－５）　８～９㎝に著しく集中しており、規格性をうかがわせるが、12～13㎝を測るものが２個体あり、いずれも口縁形態が３類であるという関係が認められる。ただしこの２個体については形象埴輪の基部である可能性もある（第24図－26・27）。

**最下段突帯の押圧技法**（第21図－６）　最下段の突帯のみ端面を板状工具で押圧する技法で、吉備地域に普遍的にみられるとされている。十六夜山古墳の埴輪にはＡ、Ｂの２種類が認められる。Ａは突帯を上下両端から摘むように貼りつけた後、未調整のまま押圧を施すもので、上下端は波打った



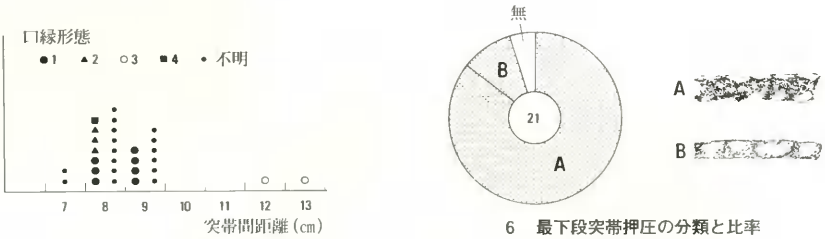

1　焼成の比率

2　外面調整の類型と比率
（模式図における突帯の本数等は異なる場合がある。）




3　Ｂ種横ハケの分類と比率

4　口縁形態の分類と比率




5　突帯間距離と口縁形態との関係

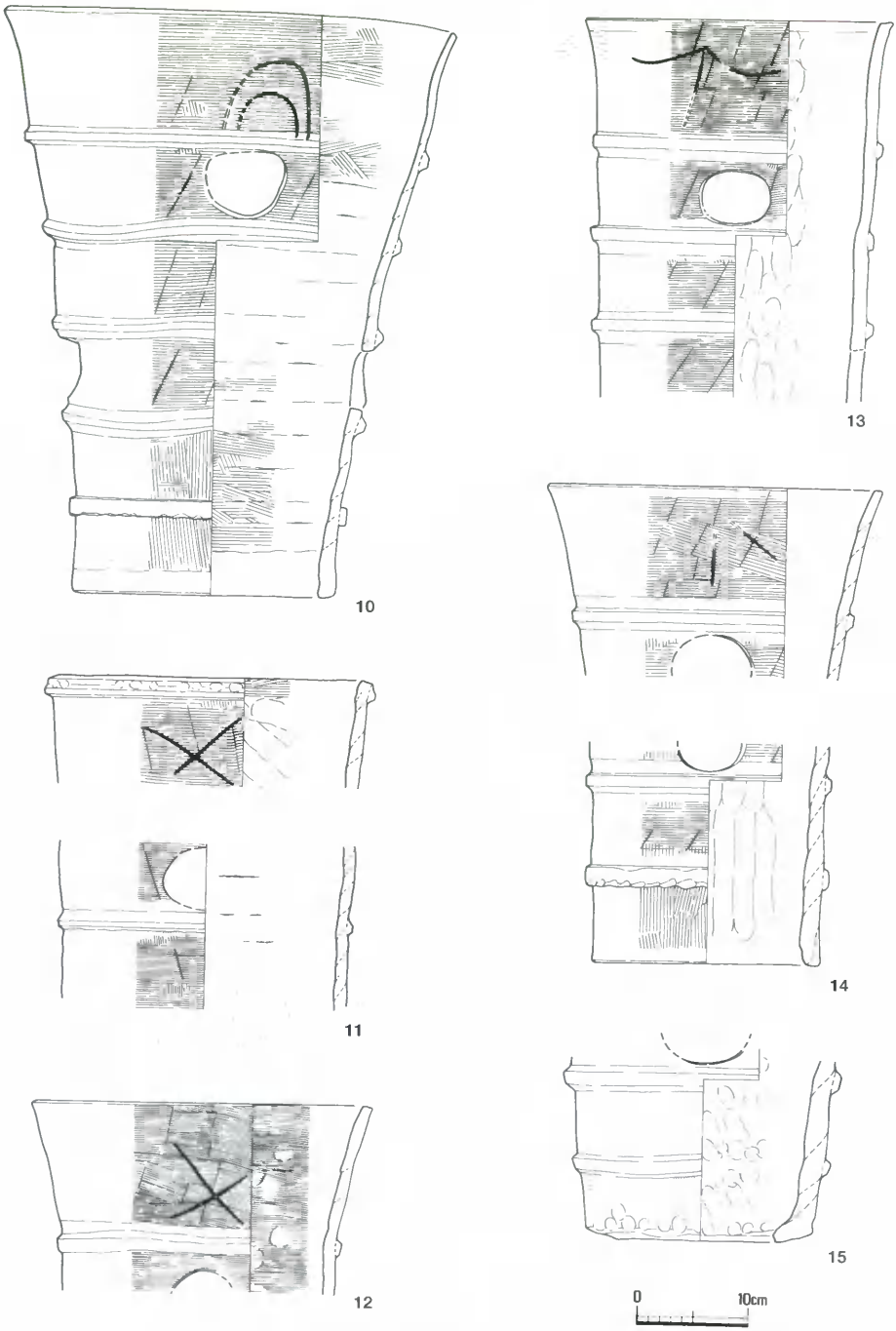
6　最下段突帯押圧の分類と比率

**第21図　円筒埴輪の諸属性と統計**
（円グラフ中央の数字は分類可能総個体数を示す。）

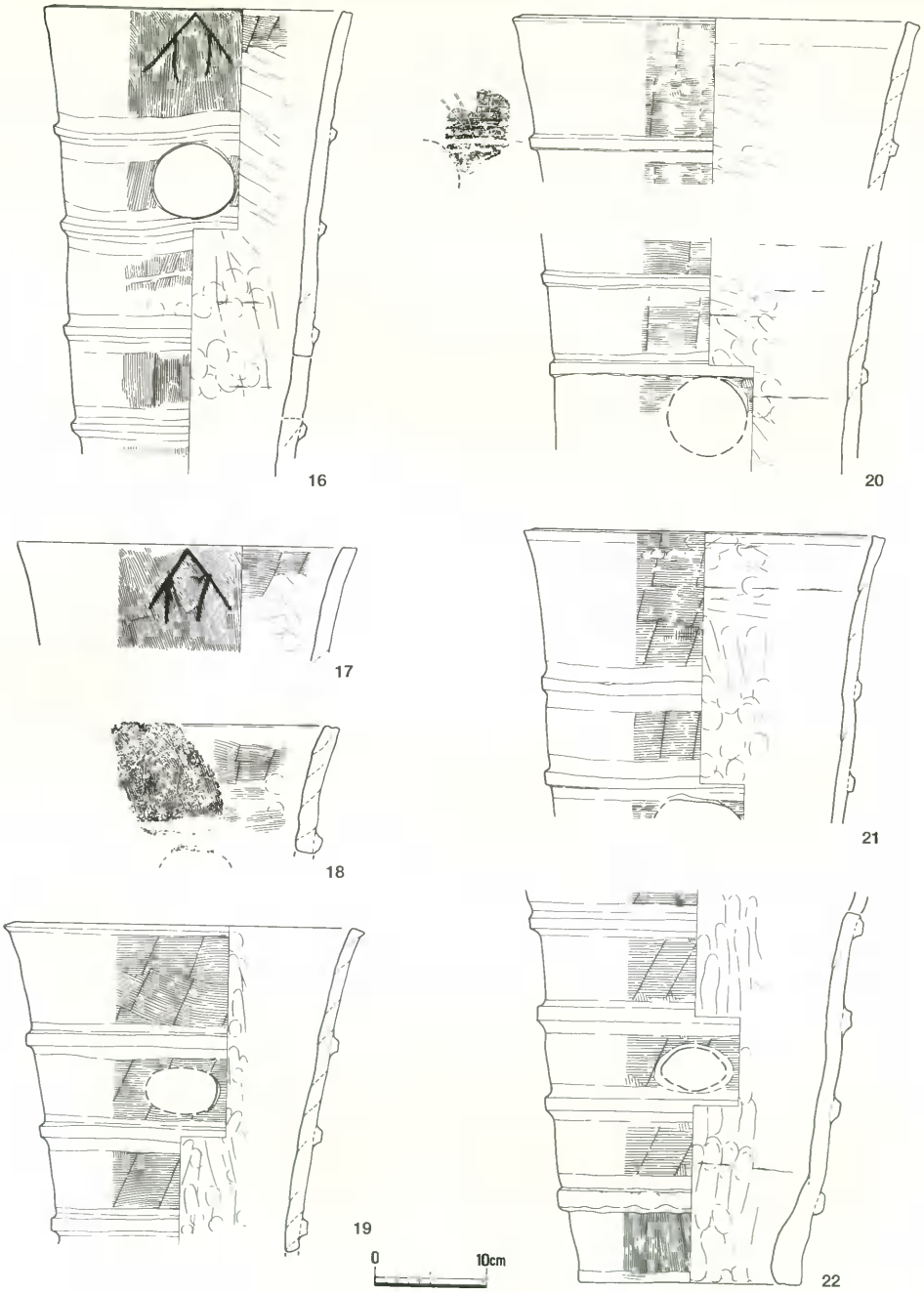
形状をなす。Ｂは突帯貼付後上下両端を横ナデ整形し、突帯端面に押圧を加えたものである。Ａが大部分でＢは２個体のみである。なお、押圧を行っていないのは１個体のみである。

**底部調整**　円筒埴輪製作の最終段階に、板状工具の押圧などによって底部の整形を行う技法で、時期決定の指標のひとつとされている。観察の困難な場合も多いが、底部のみ外面調整のハケメが消え平滑になっているものがそれに相当するであろう。大部分のものに認められるようである。

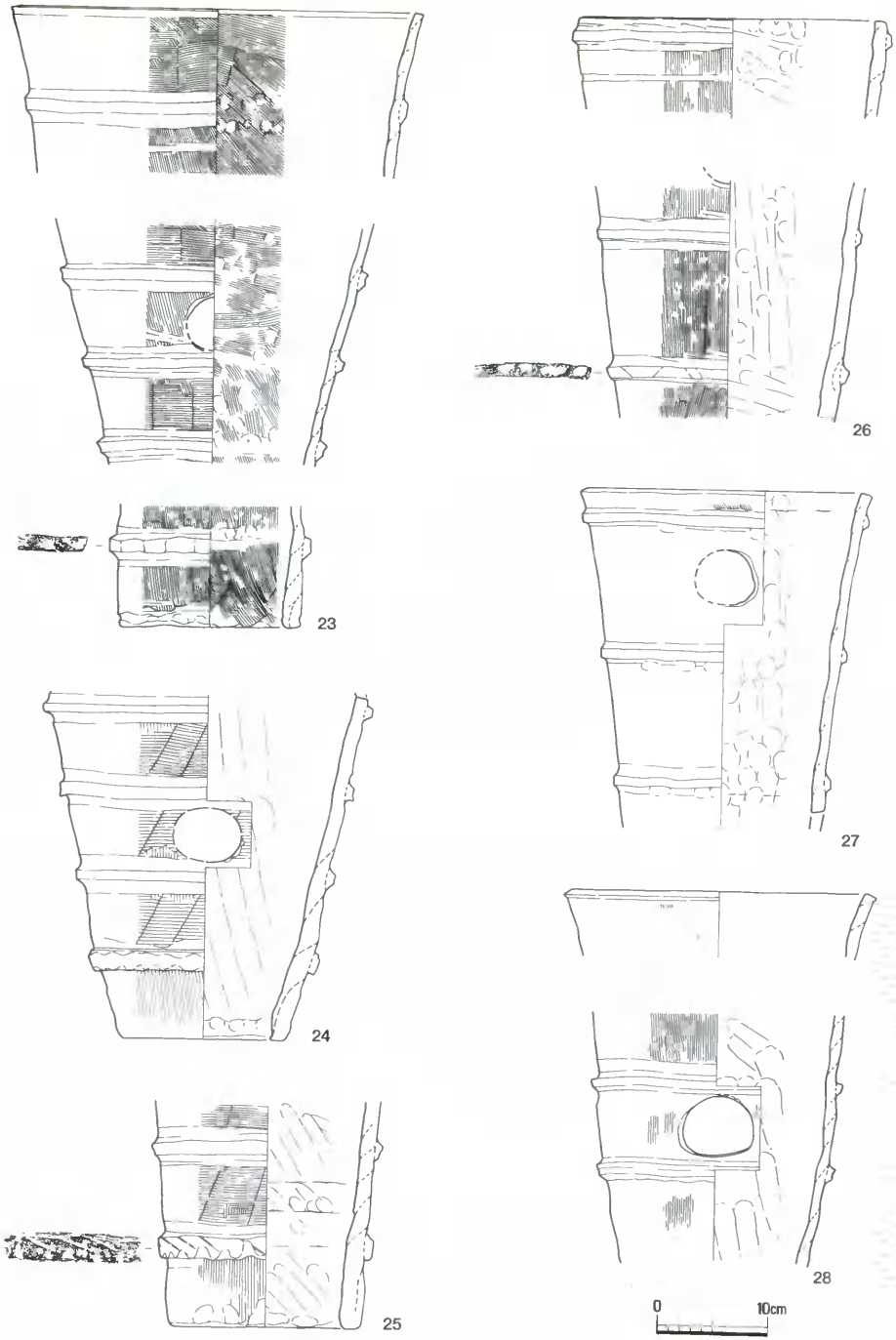
**倒立技法**　埴輪の製作途中で天地を逆転させる、いわゆる「倒立技法」の一種と考えられる技法が第24図－26にみられる。図の下端の欠損部は明らかに剥離したほぼ水平の面をなし、さらに円筒埴輪の底部接地面にしばしば認められる植物繊維の圧痕がみられる。製作途中にこの部分で接地させていたことは明らかで、おそらく倒立後、下方に継ぎ足して製作したと考えられる。その継目を消すように、この部分にのみ二次調整の縦ハケが施されている。上述したように、形態の類似する27とともに



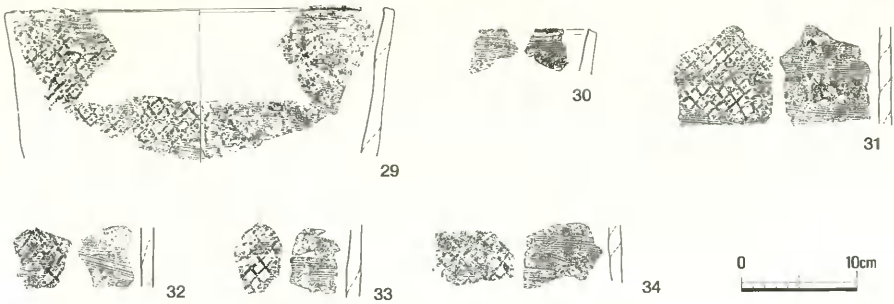

第22図　十六夜山古墳出土円筒埴輪(1)(1/5)




第23図　十六夜山古墳出土円筒埴輪(2)（1/5）




**第24図　十六夜山古墳出土円筒埴輪(3)（1/5）**




**第25図　十六夜山古墳出土円筒埴輪(4)（1/5）**

に、石見型盾など形象埴輪の基部の可能性も考えられる。

**ヘラ記号**　様々なものが認められるが、このうち「介」字形のヘラ記号をもつものはいずれも外面調整がc類であるという関係が認められ（第23図－16～18）、製作者を示している可能性が高い。

**小結**　十六夜山古墳の円筒埴輪を構成する諸要素についてみてきたが、外面調整、口縁形態、ヘラ記号などバラエティーに富む反面、突帯間距離など規格性の高さも読み取ることができる。円筒埴輪の全高については不明なものが多いが、これも大きなばらつきはないように思われる。一定の規格に従って、多くの工人が参加して製作にあたったことを示していると考えられる。またこれらの円筒埴輪の示す時期については、第5章において検討することにする。（尾上）

| 図番号 | 焼成 | 胎土中砂粒 | 色調 | 外面調整 | | 内面調整 | | 底部調整 | 口縁形態 | 最下段突帯押圧 | 突帯間距離 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 類型 | 横ハケ | 口縁 | 以下 | | | | | |
| 10 | 軟質 | 3mm大以下 | 浅黄橙 | b | B－2 | 横ハケ | 横～斜めハケナデ | 有 | ロ | A | 8cm | ヘラ記号 |
| 11 | 軟質 | 7mm大以下 | 明橙 | aまたはb | B－3 | 横ハケ | ナデ | 不明 | ニ | 不明 | 不明 | ヘラ記号 |
| 12 | 軟質 | 4mm大以下 | 橙 | aまたはb | B－2 | 横ハケ後、部分的にナデ消し | | 不明 | ロ | 不明 | 不明 | ヘラ記号 |
| 13 | 軟質 | 5mm大以下 | 明黄褐 | aまたはb | B－2 | ナデ | ナデ | 不明 | イ | 不明 | 9cm | ヘラ記号 |
| 14 | 軟質 | 3mm大以下 | 明橙 | a | B－2 | ナデ | ナデ | 有 | イ | A | 9cm | ヘラ記号 |
| 15 | 軟質 | 10mm大以下 | 橙 | 不明 | － | 不明 | ナデ | 有？ | 不明 | 無 | 7cm | |
| 16 | 硬質 | 5mm大以下 | 青灰 | c | － | 横ハケ(B－2) | ナデ | 不明 | イ | 不明 | 9cm | ヘラ記号 |
| 17 | 軟質 | 4mm大以下 | 浅黄橙 | c | － | 横ハケ(B－2) | ナデ | 不明 | イ | 不明 | 不明 | ヘラ記号 |
| 18 | 軟質 | 5mm大以下 | 橙 | c | － | 横ハケ(B－2) | ナデ | 不明 | イ | 不明 | 不明 | ヘラ記号 |
| 19 | 軟質 | 10mm大以下 | 浅黄橙 | aまたはb | B－2 | ナデ | ナデ | 不明 | ロ | 不明 | 不明 | |
| 20 | 軟質 | 10mm大以下 | 浅黄橙 | aまたはb | B－1 | ナデ | ナデ | 不明 | ロ | 不明 | 不明 | ヘラ記号 |
| 21 | 軟質 | 10mm大以下 | 橙 | aまたはb | B－2 | ナデ | ナデ | 不明 | イ | 不明 | 9cm | |
| 22 | 軟質 | 4mm大以下 | 黄橙 | a | B－2 | 不明 | ナデ | 有 | 不明 | A | 8cm | |
| 23 | 硬質 | 5mm大以下 | 青灰～浅黄橙 | d | B－1 | 不定方向ハケ | 不定方向ハケ | 無 | イ | B | 8cm | |
| 24 | 軟質 | 8mm大以下 | 青灰 | a | B－2 | 不明 | ナデ | 有 | 不明 | A | 8cm | |
| 25 | 軟質 | 3mm大以下 | 浅黄橙 | a | B－2 | 不明 | ナデ | 有？ | 不明 | A | 9cm | |
| 26 | 硬質 | 4mm大以下 | 灰黄 | c | － | ナデ | ナデ | 不明 | ハ | B | 13cm | 倒立技法？ |
| 27 | 軟質 | 8mm大以下 | 橙 | 不明 | － | ナデ | ナデ | 不明 | ハ | 不明 | 12cm | |
| 28 | 軟質 | 5mm大以下 | 明橙 | c | － | 不明 | ナデ | 不明 | ロ | 不明 | 8cm | 薄手 |
| 29～34 | 硬質 | 2mm大以下 | 灰褐～浅黄橙 | 横ハケ（B－1）後、粗い格子目タタキ | | 横ハケ（B－1） | 横ハケ（B－1） | 不明 | ロ | 不明 | 不明 | 特殊な調整 |

**第1表　円筒埴輪観察表**

**ｂ．朝顔形埴輪**（第26図）

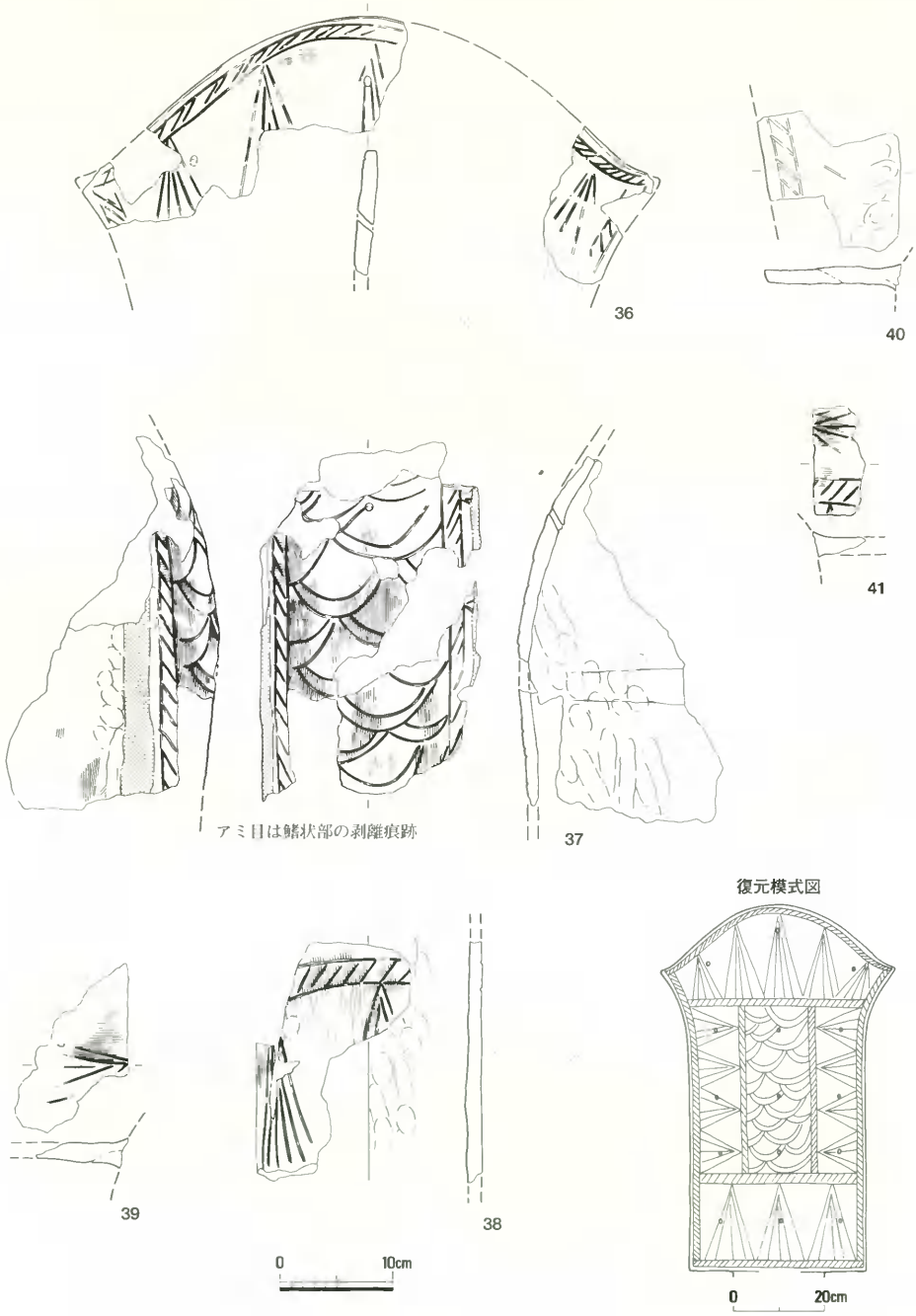
朝顔形埴輪は、図示したもののほかに、口縁部の破片など約３個体分がある。図示した35は、ほぼ完形に復元できるものであるが、口縁部についてはわずかな破片しかない。黄橙色を呈する軟質焼成のものである。外面調整は一次調整の縦ハケのみで二次調整は省略されている。内面の調整は口縁部が斜め方向のハケメで、以下は指ナデである。最下段突帯には押圧技法が認められるが円筒埴輪に比べると粗雑である。底部調整もなされていない。透かし孔は２段おきにあけられている。全高約75㎝、円筒部径20～24㎝、口径約45㎝に復元できる。（尾上）

第26図　十六夜山古墳出土朝顔形埴輪（1/5）

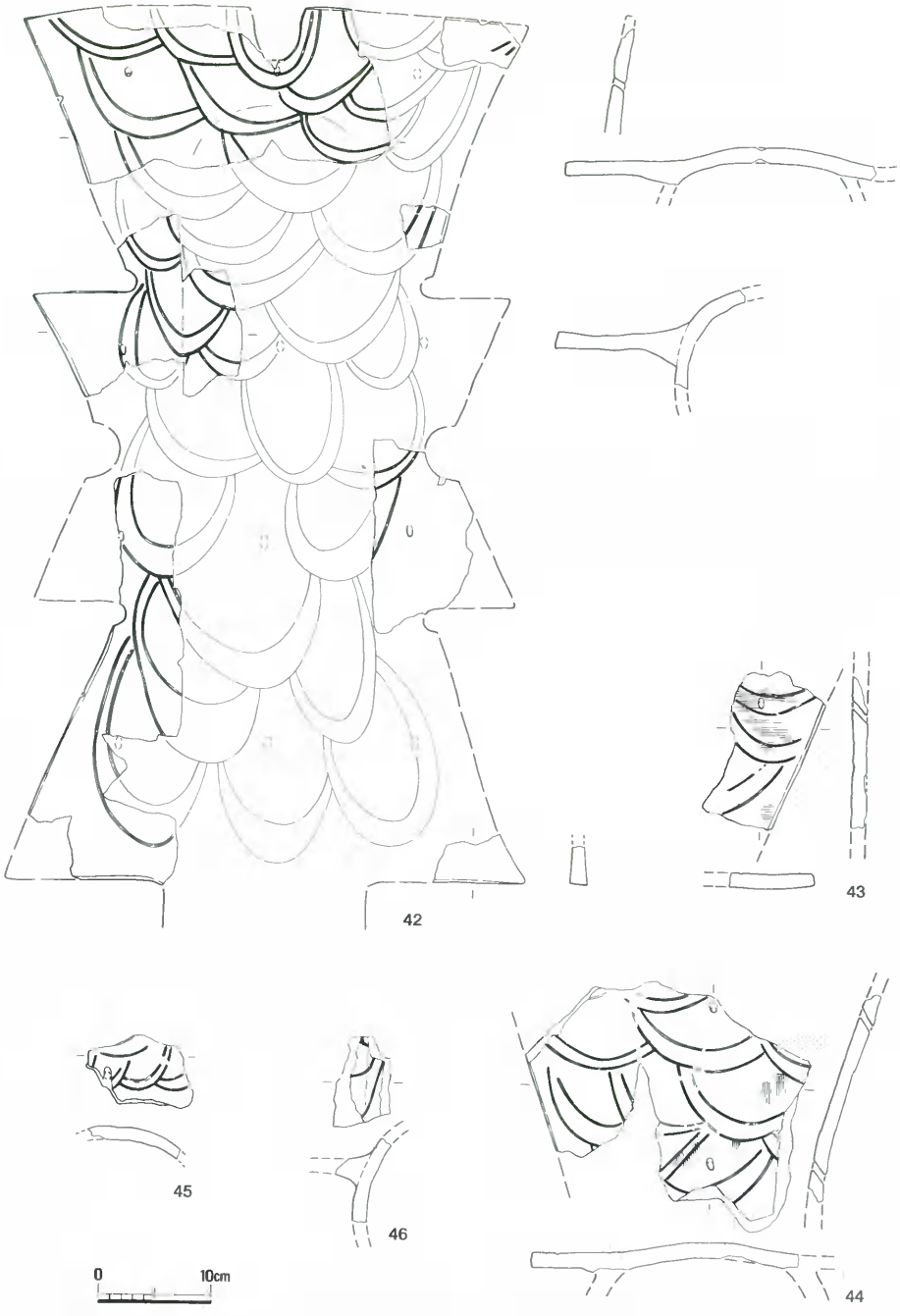
**ｃ．形象埴輪**

**盾**（第27図）　36～41はすべて同一個体と思われる。橙色を呈する軟質のもので、焼成は良くない。36は盾面上端部分、37は盾面中程の部分、38は盾面下方の部分と考えられる。39～41は盾面の側辺に近い部分で、円筒部に鰭状に取り付けられたものが剥落したものである。これらの破片から盾面を復元すると、第27図右下のようになると推定される。規模は明確でないが、幅40㎝前後、高さ80㎝前後と思われる。盾面はほぼ長方形で上端のみ円弧を描き、両端がやや突出する。盾面は２条の沈線の間を斜線で埋めた斜線帯によって縁取りされると同時に「Ⅱ」字形に分割され、外区には鋸歯文、内区には鱗状文が描かれる。これらの施文に先立つ調整として、中央の円筒部には縦ハケ、側縁の鰭状部には横ハケが認められる。また盾面の所々に斜めに貫通する小孔が穿たれている。復元模式図では15個の小孔を表しているが、数や配置は明らかでない。この小孔や鱗状文は、後述する石見型盾形埴輪に一般的に認められる特徴であり、通常の盾形埴輪には多くない。石見型盾の影響を強く受けたものであろう。

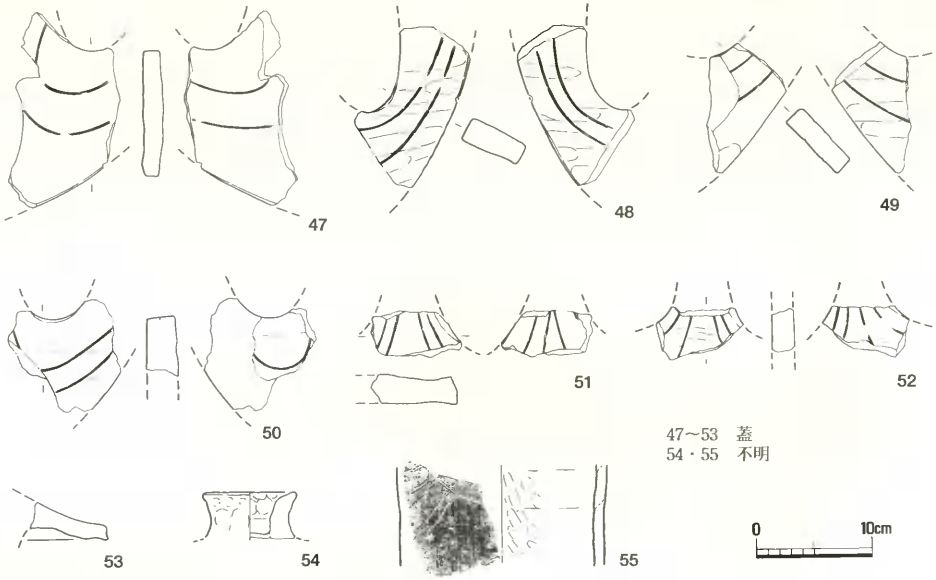
**石見型盾**（第28図）　奈良県石見遺跡出土資料を標式とする形象埴輪で、何を模したものか不明な点も多い。盾、靫、琴柱形石製品など諸説あるが、ここでは便宜上「石見型盾形埴輪」と呼んでおく。図示したもののうち、43・44が同一個体で、その他はすべて別個体と推定される。すなわち42、43・44、45、46の４個体分が認められる。焼成は42～45が黄橙色を呈する軟質のもので、45はやや焼




第27図　十六夜山古墳出土形象埴輪(1)盾（1/5）




第28図　十六夜山古墳出土形象埴輪(2)石見型盾（1/5）




**第29図　十六夜山古墳出土形象埴輪(3)蓋ほか（1/5）**

きが悪い。46は硬質で青灰色を呈する。形態、文様等はすべて同様のものであるが、45は鱗状文がやや小さい。盾面は奴形をなし、上下左右がほぼ対象であるとすれば42のような復元が可能である。盾面の大きさは高さ約80㎝、幅約45㎝を測る。文様は、盾面を分割するような直線的な文様はなく、２本１組の沈線で盾面いっぱいに鱗状文を描いている。盾面の大きさは大きい部類に属し比較的古い様相を示しているが、文様の面では退化傾向が著しい。施文に先立つ調整としては、先の盾形埴輪と同様に中央の円筒部に縦ハケ、側縁の鰭状部に横ハケの痕跡がわずかに認められるが、その後丁寧になで消しているようである。盾面を斜めに貫通する小孔の数は不明であるが、図示したように12個の可能性が考えられる。

**蓋**（第29図－47～53）　47～52は立ち飾りの飾り板の破片である。表裏両面とも丁寧な横方向の指ナデで仕上げられ、輪郭に沿った沈線文を施す。53は笠部の破片であり、外面には縦方向のハケメが認められる。47～51・53は黄橙色を呈する軟質のもの、52は青灰色を呈する硬質のものである。

なお、47～51・53は今回の調査で出土したものではなく、1974年に弓道場建設の際に出土したものであり、すでに公表されている資料である。出土位置は、十六夜山古墳北東くびれ部付近の周濠内にあたる（第30図参照）。

**不明形象埴輪**（第29図－54・55）　54は黄橙色を呈する軟質焼成のもので、短い円筒状のものを平坦な面に貼りつけている。動物埴輪の一部であろうか。55は内外面とも橙色を呈するが断面灰色の硬質な焼成のものである。外面縦ハケ調整の細い円筒に直弧文系の文様をヘラで描いている。このような、細目の円筒部に施文する形象埴輪としては、盾、大刀などの器材形埴輪が考えられよう。そのほか、図示していないが、第１次確認調査Ｔ10の外濠に相当する部分から、家形埴輪の一部かと思われる小破片が出土している。

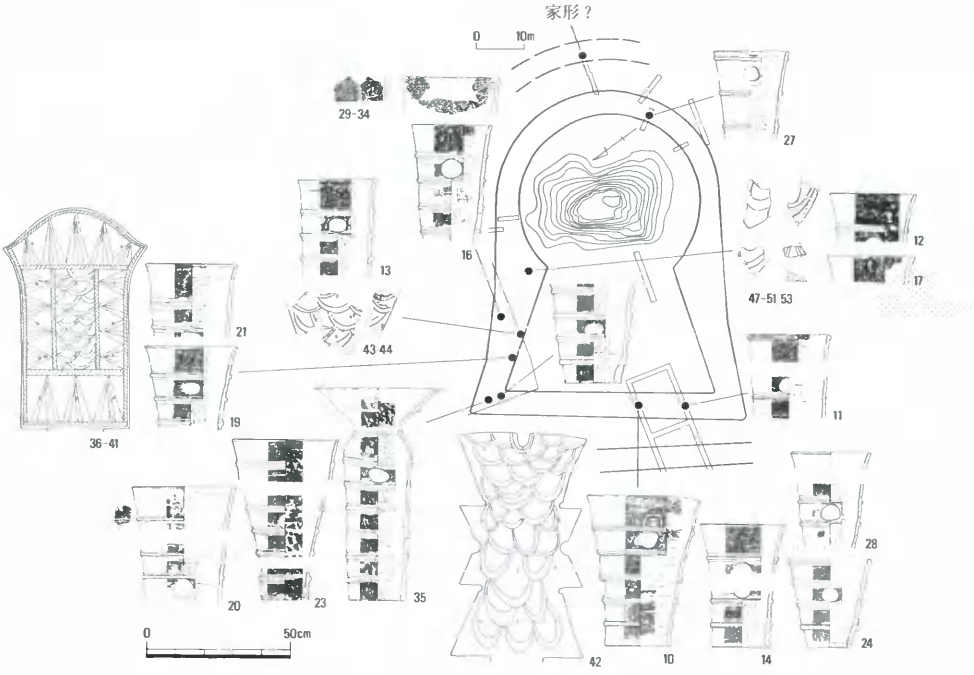
（尾上）

### d．埴輪の配列について

今回の発掘調査で出土した埴輪は、いずれも周濠内に転落したものや後世の撹乱を受けた状態で出土したものばかりであり、原位置を保つものは皆無である。また発掘調査の対象となったのも古墳全体からいえばごくわずかな部分であり、埴輪の配列状況を知る手がかりは非常に乏しい。各埴輪の出土位置を第30図に示したが、各埴輪を構成する破片がある程度まとまって出土している場合のみ示している。周濠内のみの調査であり、これらの埴輪の多くは墳裾に配列されていたものと考えられるが、中には周濠外に立てられていたものや墳頂から転落したものも含んでいるであろう。

円筒埴輪については、調査した部分のほぼ全域から出土しており、墳頂や墳裾全体を取り巻くように配列されていたものと考えられる。

形象埴輪については、同一個体の破片が多数まとまって出土したものを挙げれば、くびれ部で蓋形埴輪、前方部北東側辺部で盾形埴輪と石見型盾形埴輪、前方部前面で石見型盾形埴輪が出土している。特に石見型盾形埴輪は、今回の調査区内でも４個体分が確認され、他の形象埴輪より個体数が多いことから、円筒埴輪や朝顔形埴輪の間にまじえて墳裾に樹立されていたと考えられる。　（尾上）




第30図　埴輪出土位置図（墳丘1/1,200、埴輪1/20）

註

(1)～(3)　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　1978

(4)　小栗明彦「埴輪倒立技法の問題」『史学研究集録』第17号　1992　に整理、総括されている。

(5)　末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第12冊　1935

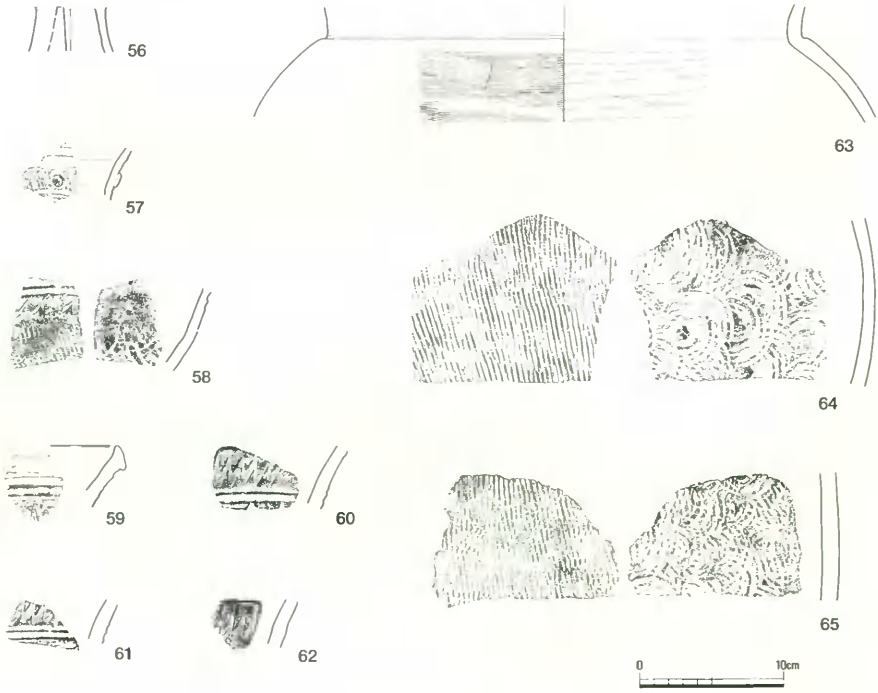
(6)　松木武彦「吉備の蓋形埴輪－器材埴輪の地域性研究に関する予察－」『古代吉備』第16集　1994

## ５．須恵器

十六夜山古墳周濠内出土の須恵器を第31図に示した。いずれも灰色～青灰色を呈する堅緻な焼成のものであるが、63のみ内外面灰色～灰黄色、断面淡黄色を呈し、胎土もやや異なる。

56は高杯脚部の破片である。57は瓶または壺の頸部と考えられ、櫛描波状文の上に円形貼付文を付している。58は器台である。上半部は内外面横ナデ、下半部内面は同心円当て具痕を残し、外面は平行タタキの上からカキメを施す。また上半部外面には凹線文と櫛描波状文がみられる。59～62は同一個体と考えられる甕の口縁部～頸部である。頸部には上下２か所にそれぞれ３条の凹線文があり、その間を櫛描波状文で埋めている。63は甕の頸部から胴部にかけての破片で、頸部は内外面横ナデ、胴部外面は横ハケ、胴部内面は丁寧な横方向の指ナデである。タタキの痕跡は全く残さない。胎土・色調ともあわせ、他の須恵器とはやや異質である。64・65は甕の胴部で、外面は縦方向に平行タタキを施し、内面は同心円当て具痕の上から若干のナデを加えているが当て具痕は明瞭に残されている。以上図示したもののほかに、外面に格子目タタキをもつ甕胴部の破片がみられるが、ここでは古代の遺物をできるだけ排除するため、甕類については周濠内下層部出土の須恵器のみを選んで掲載した。

以上の須恵器の時期的な位置付けについては、わずかな部分の破片が多く、また時期を特定しやすい杯などの器種がないため困難であるが、おおむね５世紀末葉から６世紀前葉頃の年代が与えられよう。十六夜山古墳築造年代の決定については円筒埴輪の方が有効な手段となると思われる。　（尾上）

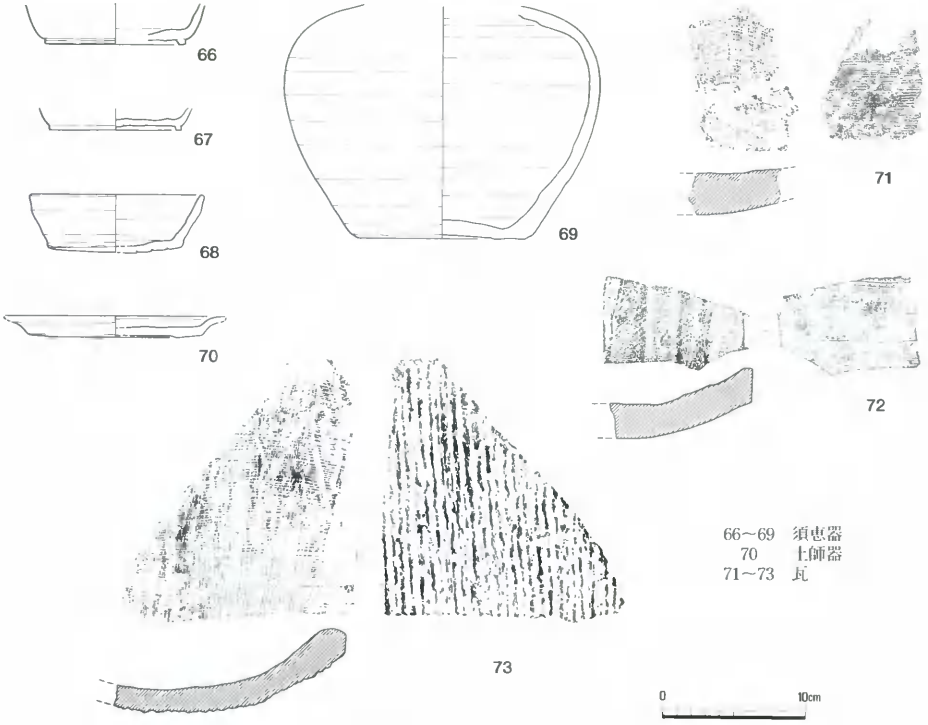



**第31図　十六夜山古墳出土須恵器（1/4）**

## 第４節　古代の遺物

十六夜山古墳の周濠内より古代の遺物が若干出土している，66～69は須恵器で、いずれも灰色～青灰色を呈する堅緻な焼成のものである。66～68は杯、69は壺である。69は内外面とも横ナデによって仕上げられているが、底部はヘラおこし後、中央部を中心に指オサエで整えている。70は丹塗りの土師器皿である。71～73は瓦で、いずれも平瓦の破片である。72は灰色を呈し堅緻に焼かれているが、71・73は焼成がやや甘く灰白色を呈し瓦質に近いものである。71・72はやや厚手で、凹面には布目、凸面には丁寧な横ハケが認められる。73は、71・72に比べると薄手で、凹面には布目、凸面には縦方向の縄目タタキが認められる。以上の遺物の年代は、明確でないものもあるが、66・67が奈良時代、68～70が９世紀代、71・72が白鳳期、73が奈良時代と考えられる。

古代の遺構は発見されていないが、以上の遺物から、白鳳、奈良時代に瓦葺きの建物が存在したことが推定され、注目に値する。美作国府に近いことや、当遺跡の所在する「椿高下」の地名をも考えあわせると、公的施設の存在を想定することも可能である。また、これらの遺物が十六夜山古墳の周濠内より出土していることから、古代にはまだ周濠は埋没していなかったことが知られる。おそらく前方部もこの段階にはもとの姿を留めていたものと思われる。中世以降の開発によって前方部が削平されると同時に、古代の遺構も失われたのであろう。　（尾上）




第32図　古代の遺物（1/4）

# 第５節　近世の遺構と遺物

## １．概　略

当遺跡の所在する津山市椿高下は、江戸時代の文献や絵図に「椿高下侍屋敷」として登場する。武家屋敷域では最も北端部にあたる場所である（第３図参照）。絵図は、作成年代の異なるもの数枚が残されており、それらによって町割りの様子や、場合によっては居住者の氏名までも知ることができる。また、調査地の近隣には「椿高下の高石垣」と呼ばれる近世の石垣が残っており、傾斜地に石垣を用いながら造成を行って、城下町が建設されていったことがうかがえる。

調査区内は、全体に明治期以降の削平が及んでおり、地形の高い南側では遺構は希薄で、井戸などの深い遺構のみが残存している状況である。また、旧校舎の基礎など学校関連の施設による破壊が、かなりの範囲に及んでおり、遺構の失われている部分も多かった。しかしながら、調査区北半部を中心として、多くの遺構を確認することができた（第33図）。図示したものの他にピット多数があるが、時代を特定できないものも多く、第33図においては省略している。検出された遺構は、幅９ｍの道１条、柱穴列16条、溝18条（うち柱穴列９条、溝７条は道の側辺をなす。）、近世初期の素掘りの井戸１基、近世後期の石組みの井戸２基、桝状の石組み２基、土壙13基、木棺墓１基、集石２基である。建物は検出されなかったが、おそらく礎石建物で、明治以降の学校建設の際の造成によって削平され、失われたと考えられる。

これらの遺構は、絵図に示された屋敷割りとある程度一致するものであることが明らかになった。特に調査区の中央を東西に貫通する道はいずれの絵図にも共通してみられるものである。この道は、原地形を考え合わせると、尾根線に平行して走っていることがわかる。そのほかの遺構はこの道にほぼ平行、直交する形で検出されている。道に直交する柱穴列、溝のうち、柱穴列11・12・15、溝８・18は、絵図における屋敷境にほぼ一致するものである。

なお、第１節でも述べたように、大部分の遺構の検出は地山面で行っており、本来どの程度の造成が行われていたのか、必ずしも明らかにできなかったため、第33図には遺構面の等高線を示していない。ただし、井戸３付近では地山の上に約50㎝の厚さの造成を行っていたことが確認できている。これによれば、調査区の北端と南端では１ｍ程度の比高差があったと考えられ、原地形の傾斜を完全に解消するまでの造成は行われていなかったと推定される。

以下、各遺構および出土遺物について概説するが、出土陶磁器個々の説明については観察表（第２・３表）にゆずることとし、本文中では基本的に、それらの陶磁器から推定される遺構の時期について述べる程度にとどめておく。陶磁器以外の遺物については本文中で解説する。　（尾上）

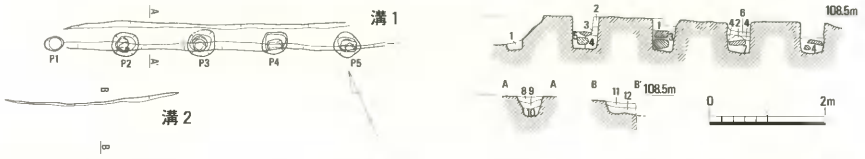
## ２．道（第33～42図）

調査区を南東から北西方向に横切るように道を検出した。この道は津山城下町図にも記載されている（第３図参照）ことから、津山城下町の道と判断した。道の幅は最大で約９ｍを測る。道の両端には柱穴列や溝がみられ、柱穴列１～９および溝１～７がこれに相当する。

柱穴列は校舎の基礎などで破壊されているが、すべて直線上にならび、柱穴列１～３が道の北辺に、柱穴列４～９が道の南辺に位置する。道の南辺の柱穴列７～９は切り合いが確認され、柱穴列９、柱

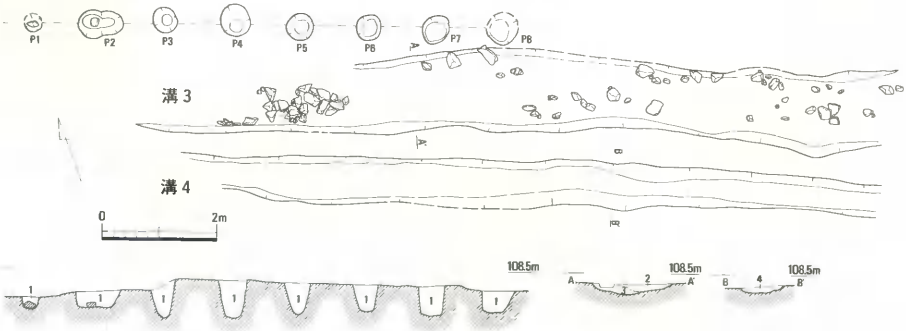
第33図　近世の遺構配置図（1/400）

穴列８、柱穴列７の順番で新しくなり、道幅を狭めながら構築されたものと考えられる。なお、柱穴列５と柱穴列６の新旧は不明である。柱穴列の穴の中には、柱の存在が確認できるものがあり、道に沿って塀などの構築物があったものと推定される。柱穴には、検出面からの深さが浅く埋土に礫を含むものや、深くてあまり礫を含まないものなどが存在する。特に柱穴列５では、Ｐ11とＰ12の間を境に柱穴の様相が異なっている。柱穴列５のＰ１～Ｐ11は深さが約40㎝と浅く、また柱穴内に礫を多く含んでいるが、柱穴列５のＰ12～Ｐ24は深さが約70㎝と深く、礫もあまり含まれていない。また、柱穴列７～９は残存状況が必ずしも良好とはいえないが、柱穴列５のＰ12～Ｐ24に比べ浅く、また大きさもやや小さめである。これらの柱穴の様相の違いは、当地における屋敷地の差異に相当すると考えている。これらの柱穴から出土した遺物は少ないが、陶器類（第40図）が出土した。74は肥前陶器であり、内面に砂目、底部に糸切痕がみられる。75・76も肥前陶器である。77は備前焼の摺鉢である。



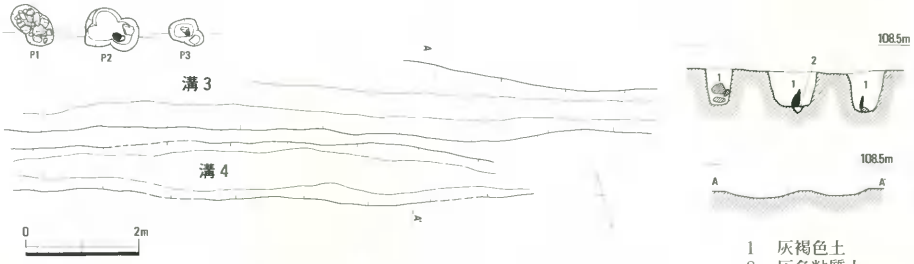

1　にぶい褐色粘質土　2　灰褐色土　3　褐色土　4　暗褐色土　5　暗褐色粘質土　6　暗赤褐色土
7　暗黄褐色土　8　灰褐色土　9　にぶい褐色土　10　暗灰褐色土　11　褐灰色土　12　暗赤褐色土

**第34図　柱穴列１・溝１・２（1/100）**



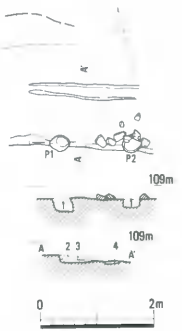

1　灰褐色土　2　明褐色土　3　赤褐色土　4　明赤褐色土（礫を含む）

**第35図　柱穴列２・溝３・４西半分（1/100）**



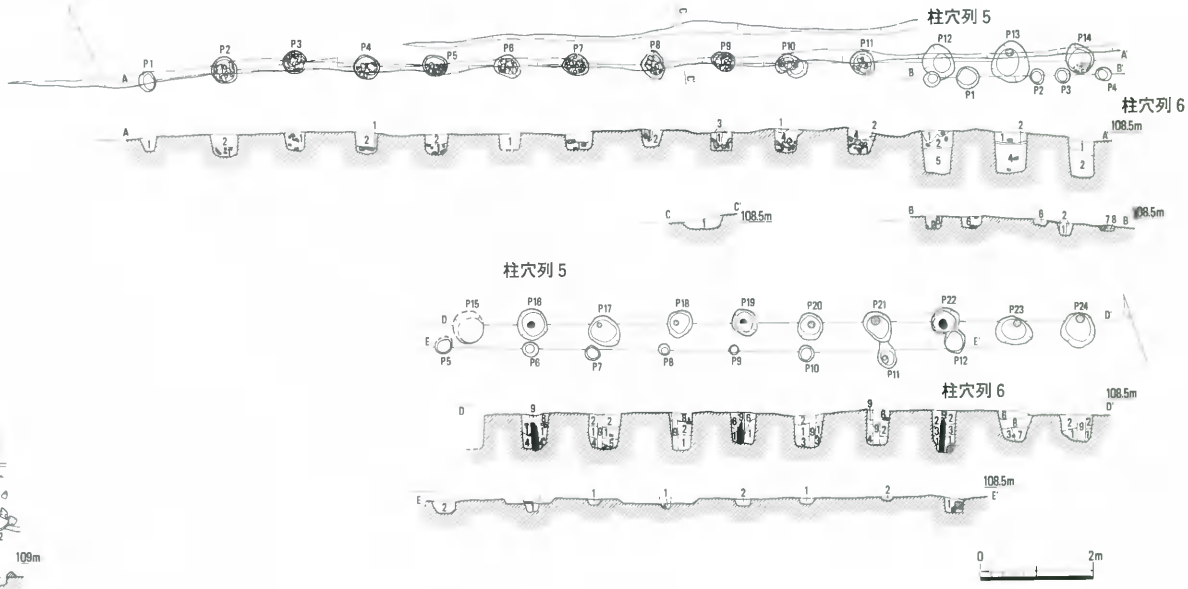

1　灰褐色土
2　灰色粘質土

**第36図　柱穴列３・溝３・４東半分（1/100）**



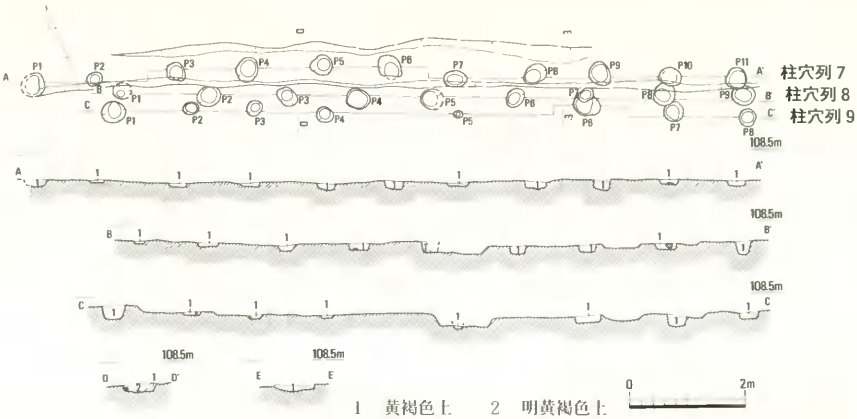

1　明褐灰色土
2　にぶい赤褐色土
3　明黄褐色土
4　黄褐色土

第37図　柱穴列4・溝5（1/100）

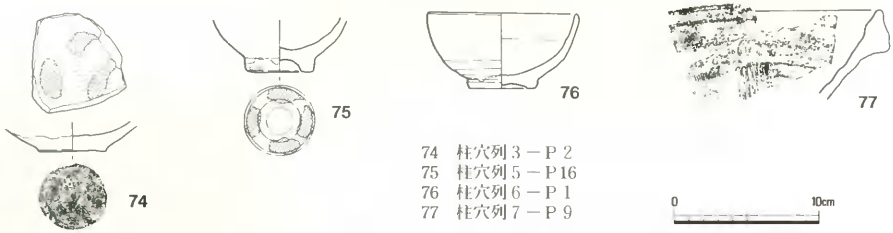



1　暗褐色土　2　暗黄褐色土　3　暗赤褐色土　4　暗灰褐色土　5　黄灰褐色土
6　明黄褐色土　7　灰色粘質土　8　黄褐色土　9　青灰色粘質土

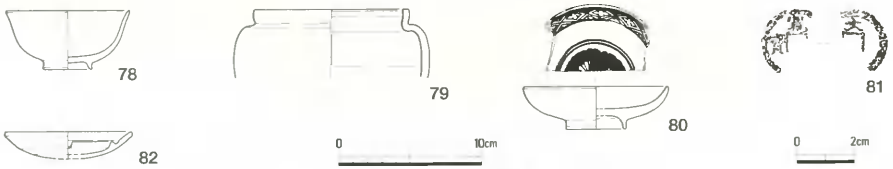
第38図　柱穴列5・6・溝6（上　西半部、下　東半部、1/100）




第39図　柱穴列７～９・溝７（1/100）




第40図　道に伴う柱穴列出土遺物（1/4）




78　溝１　79　溝２　80・81　溝３　82　溝５

第41図　道に伴う溝出土遺物(1)溝１～３・５（1/4、1/2）

これらの出土遺物より、柱穴列は17世紀以降に営まれたものと考えられる。

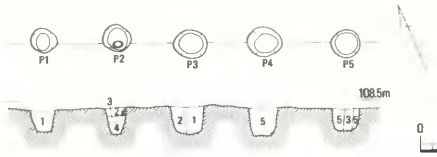
また、柱穴列に沿って溝が並走しているが、切り合い関係より溝の方が新しい遺構であることがわかっている。溝は柱穴列より道の中央寄りにつくられており、道幅は当初より狭くなったと考えられる。溝内からは多くの遺物が出土したが、そのほとんどは陶磁器類である（第41・42図）。陶磁器は肥前系のもの（80・84・91・92・96・97）あるいは備前焼（82・101）に加え、関西系、瀬戸・美濃系のもの（78・79・83・85～90・93～95・98～100）が多くみられるのが特徴である。また、99・100など装飾性に富むものも多い。金属製品や石製品も若干出土している。81は寛永通宝である。また、図示していないが、「十一」と刻まれた薄い石板も出土した。これらの遺物より溝は18世紀後半以降から津山中学校がつくられる明治30年代頃まで存在したものと考えられる。（金田）

第42図　道に伴う溝出土遺物(2)溝４（1/4）

## ３．柱穴列（第43～48図）

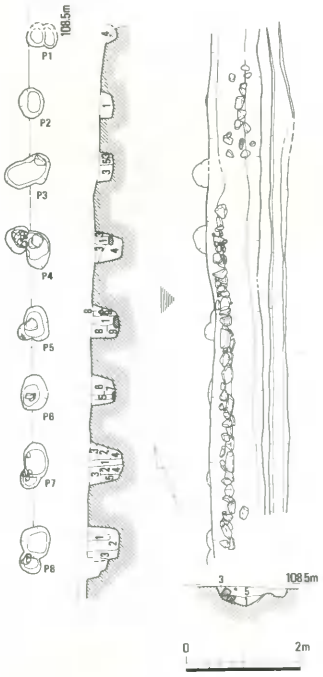
ここでは、道の側辺をなす柱穴列以外のものを扱う。柱穴列10～16の７条がある。いずれも上述の道に平行、直交する方向のものである。柱間距離は1.2～1.5ｍのものが多いが、柱穴列12のみ2.3ｍを測り、やや長い。柱穴の規模はそれぞれの柱穴列によって異なっている。最も大きい柱穴列12で径70～80cm、深さ１ｍを測る。柱穴列11は溝８と重複しており、溝８よりも古い。同様に、柱穴列15と溝18も近接しているが、柱穴列15の方が古い。これらの前後関係は、柱穴列による区画から溝による区画へ変化したことを示すものである。なお、柱穴列15・16は同時存在の可能性が高い。

これらの柱穴列は、建物を構成するような対応する柱穴列がなく、また非常に深く掘り込まれる傾向があることから、板塀ではないかと思われる。また出土遺物を第49図に示したが、17世紀代の比較的古い肥前磁器が多い（102・103・105）。柱穴列12のみ幕末期の磁器を出土しているが、この柱穴列のみ柱間距離が他と異なって長いことと関連しているであろう。（尾上）



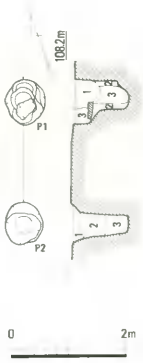

1　にぶい赤褐色土　2　赤褐色土
3　にぶい赤褐色粘質土　4　明赤褐色粘質土
5　赤褐色粘質土

第43図　柱穴列10（1/100）



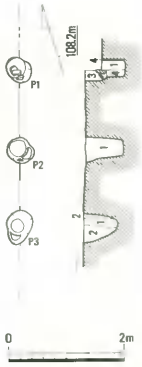

1　暗褐色土　2　黄橙色土　3　にぶい橙色土
4　暗赤褐色土　5　灰色土　6　褐灰色土
7　黄灰色土　8　明赤褐色土　9　赤褐色土

第44図　柱穴列11・溝８（1/100）



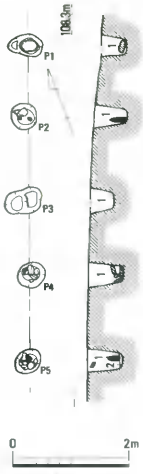

1　褐色土
2　灰褐色土
3　黒褐色粘質土

第45図　柱穴列12（1/100）



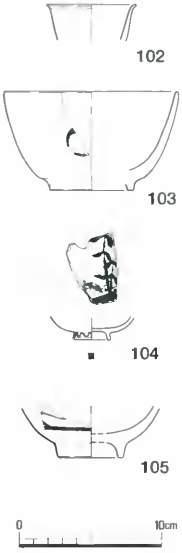

1　黄橙色土
2　灰黄色土
3　黄褐色土
4　明褐色土

第46図　柱穴列13（1/100）



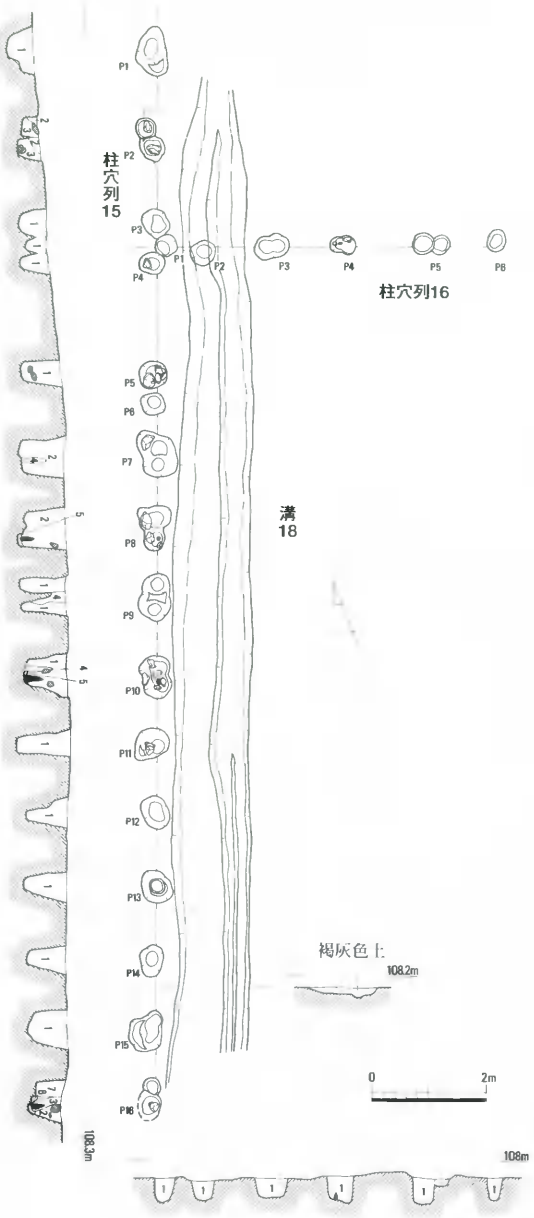

1　褐色土
2　灰色粘質土

**第47図　柱穴列14（1/100）**




102　柱穴列11－Ｐ１
103　柱穴列11－Ｐ３
104　柱穴列12－Ｐ２
105　柱穴列15－Ｐ12

**第49図　柱穴列出土遺物（1/4）**

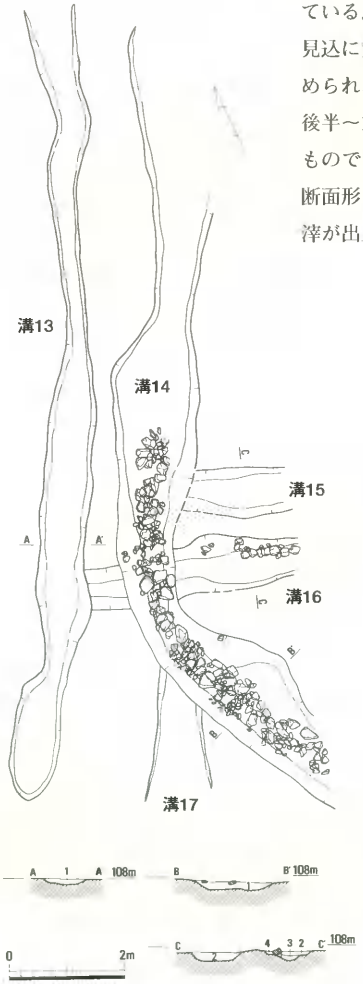



1　褐色土　　2　にぶい黄褐色土　　3　黄灰色土
4　緑黄色土　　5　灰褐色粘質土　　6　灰白色粘質土
7　黄橙色土

**第48図　柱穴列15・16・溝18（1/100）**

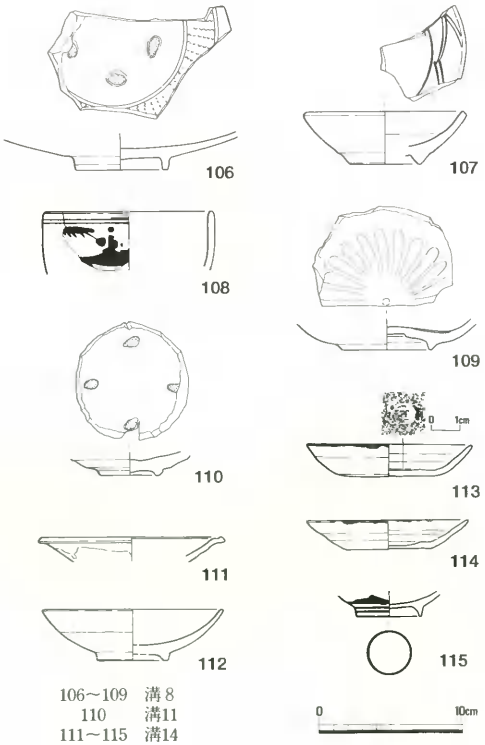
## ４．溝（第44・48・50・51図）

ここでは、道の側溝をなすもの以外を扱う。溝８～18の11条がある。溝８（第44図）は柱穴列11と重複するもので、溝の西辺部に東側に面をそろえた石組みがある。遺物は17世紀代の比較的古いものも含んでいるが、近世後半期の遺構と推定される。溝９～12は痕跡程度に残存するもので、全体図（第33図）に示したのみである。溝13～17（第50図）は近接して検出されたものである。溝14は「く」の字形に屈曲する溝で、多数の拳大の礫を含んでいるが、その機能的な意味は不明である。この溝からは土師質土器の皿が多数出土している。口縁部に煤の付着した灯明皿であり（第51図－113・114）、見込に刻印をもつものがみられる（113）。溝16には北側に石列が認められ、南側に石の面をそろえている。出土遺物から溝14が17世紀後半～18世紀初め頃、切り合い関係から溝15～17がそれに先行するものである。溝18（第48図）は柱穴列15に近接し平行するもので、断面形は雨落ちを思わせる。幕末～明治期の陶磁器のほか、瓦、鉄滓が出土している。（尾上）




1　黒褐色土
2　黄褐色土
3　灰色粘質土
4　暗灰黄色土（石組み裏込め）

第50図　溝13～17（1/100）



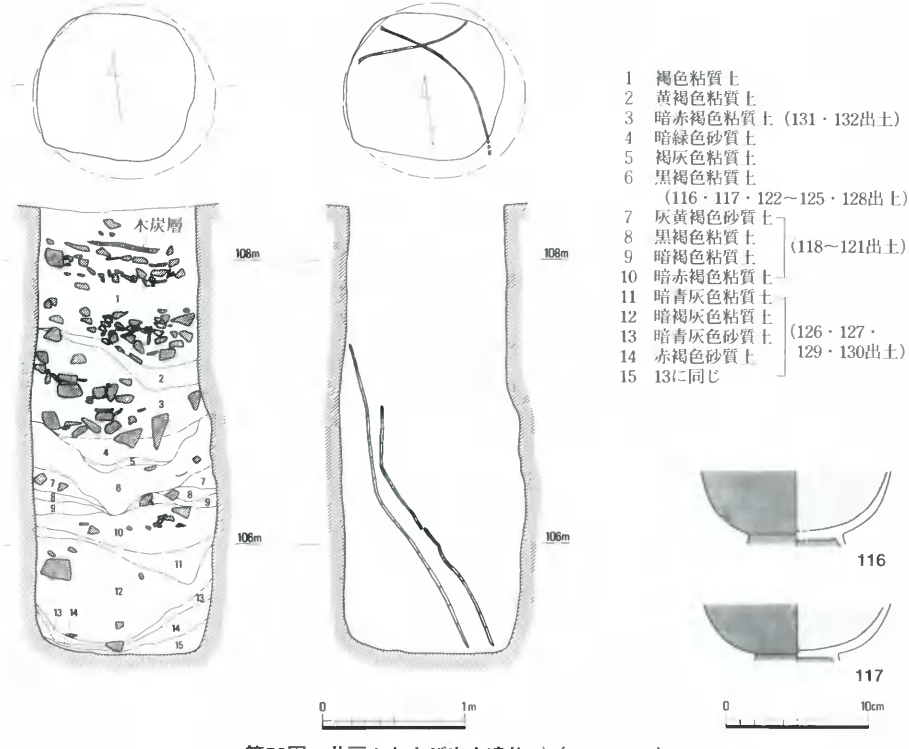

106～109　溝８
110　溝11
111～115　溝14

第51図　溝出土遺物（1/4）

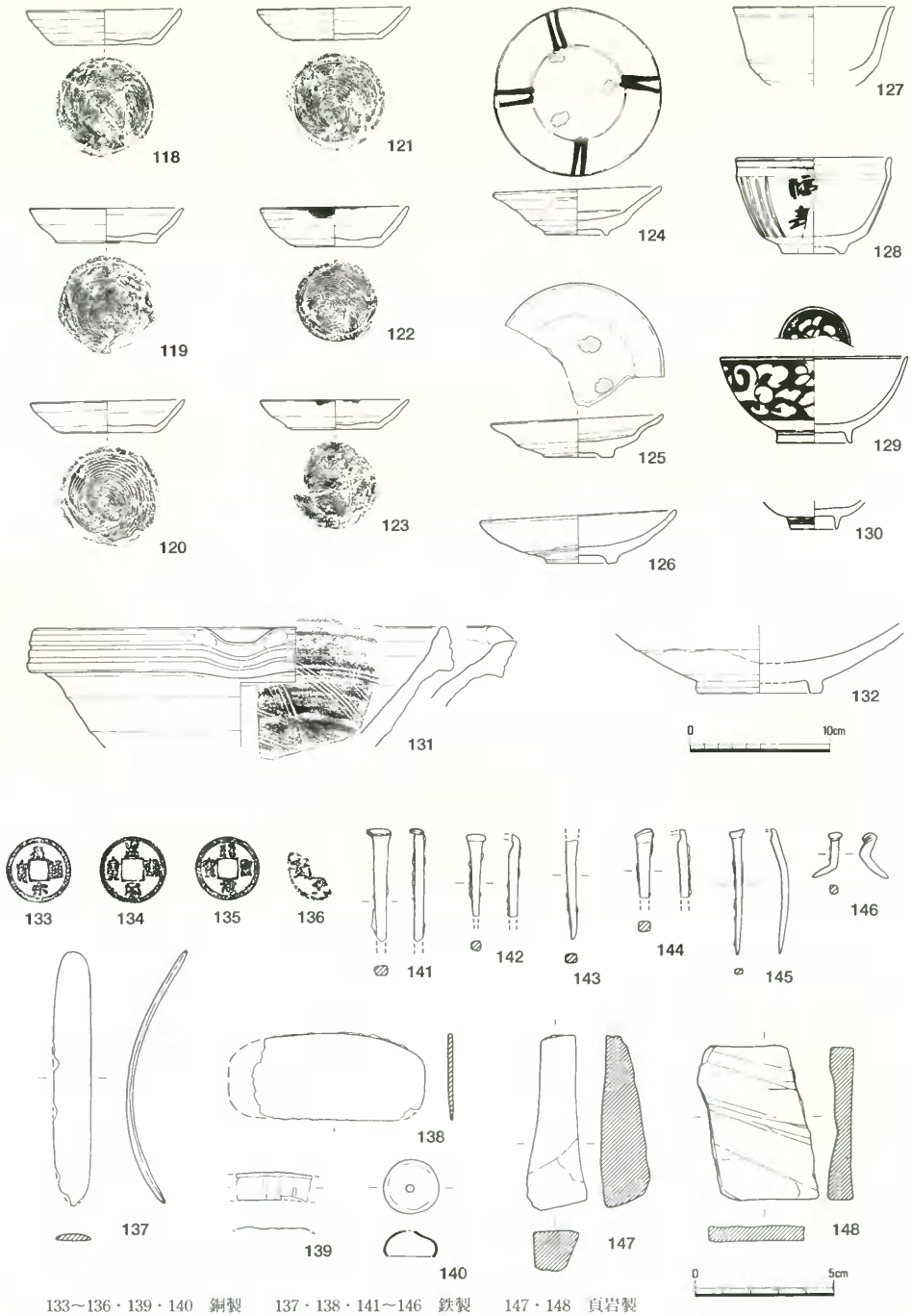
## ５．井　戸

**井戸１**（第52・53図）

調査区南半部の中央付近で検出した素掘りの井戸であり、径108㎝、深さ310㎝を測る。井戸の上半部（第１層～第３層）では埋土から多くの礫が検出され、ところどころで炭片がみられた。これらの埋土に混じって遺物が出土したが、いずれも破片であった。これらの埋土は井戸の廃棄に伴って、埋め戻された土と考えられる。井戸の下半部はいずれも粘質土および砂質土が堆積しており、層の中央付近が幾分へこんでいることから、第４層付近までは井戸使用時に堆積したものと考えられる。遺物の大部分は第４層以下で検出されている。井戸の底から銭貨４枚（133～136）が出土し、井戸の使用開始に伴い、投げ入れられたものと考えられる。井戸内の埋土はすべて水洗を行った。その結果、陶磁器をはじめ金属製品などの多くの遺物を発見した（第52・53図）。116・117は漆椀である。いずれも内面は赤色、外面は黒色である。118～123は土師質皿である。いずれも底部に糸切痕がみられる。124～127・132は肥前陶器で、128は肥前磁器である。129・130は輸入磁器である。129は福建省系で、130は景徳鎮産である。これらの陶磁器は井戸埋土の中ほどよりやや下の位置で発見され、井戸内に落ちたものと推定される。131は備前焼の摺鉢で、井戸の上半部より出土した。133～136は銭貨である。133・134は皇宋通宝、135は紹聖元宝である。136は破損しているが□□元宝とよめる。137は用




**第52図　井戸１および出土遺物(1)（1/40、1/4）**



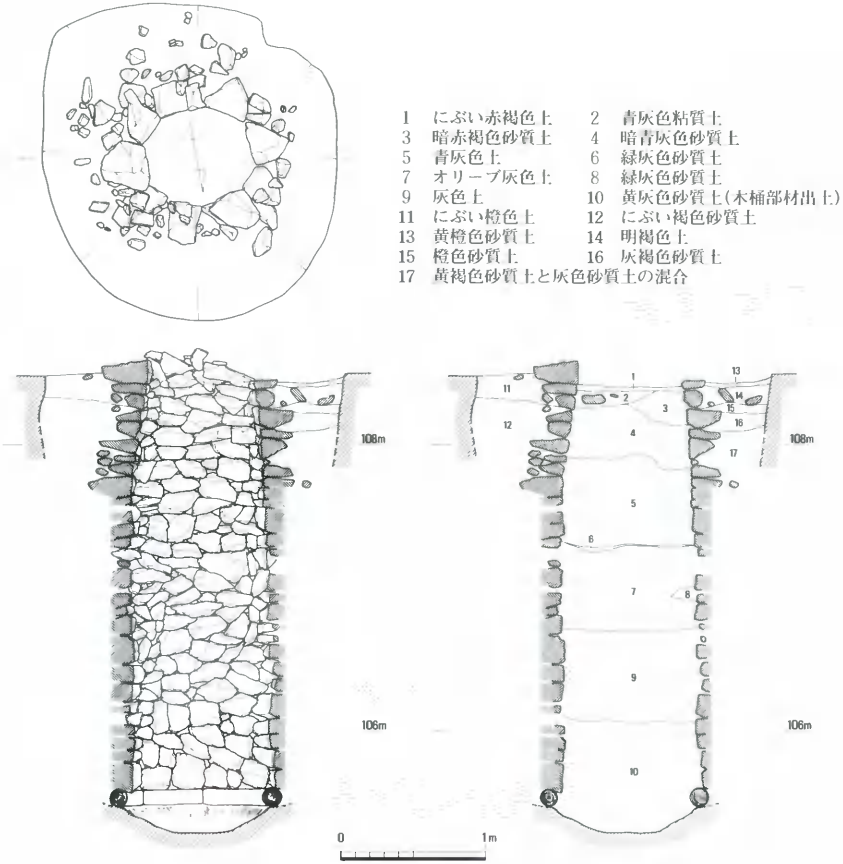

133～136・139・140　銅製　　137・138・141～146　鉄製　　147・148　頁岩製

**第53図　井戸１出土遺物(2)（1/4、1/2）**

途不明鉄製品である。138は刃物である。139は用途不明銅製品である。140は銅製飾金具である。141～146は鉄釘である。147・148は砥石であり、頁岩製である。そのほかに木製品として、木材の破片や竹の破片が出土したが、井戸の木枠等の部材は含まれていない。竹については竹籠のようなものが出土した。また、動植物遺体として井戸内から植物の種子およびネコ、ネズミ、カエルの骨が出土した。特に動物遺体については井戸に転落した動物の骨と考えられる。また、井戸には竹が２本差し込まれており、井戸廃棄時の祭祀に使用されたものと考えられる。これらの遺物から井戸１は17世紀前半を中心に営まれ、時をあまり経ずして廃棄されたと思われる。（金田）

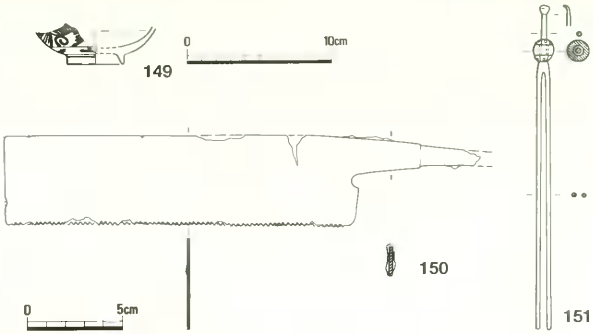
**井戸２**（第54・55図）

調査区南西部で検出した井戸である。井戸は、十六夜山古墳の周濠内に相当する位置にあり、径約80㎝の石組みの円筒形の井戸である。井戸の掘り方は不整円形を呈する。井戸の上面は削平されているが、深さは約330㎝を測る。井戸の基底部には丸太が敷いてあり、その上から20～30㎝前後の人頭大の石を積み上げている。底部は浅い皿状を呈し、地山の岩盤を削ってつくられていた。岩盤の表面




**第54図　井戸２（1/40）**

には放射状に工具痕がみられた。井戸の井筒に相当する部分はみられなかった。井戸の埋土は粘質土および砂質土で構成されている。埋土はすべて水洗できなかったが、陶磁器や金属器および木製品などの遺物が出土した（第55図）。149は磁器である。瀬戸・美濃系と考えられる。150は鋸で、茎部が一部欠損している。151は銅製簪である。頭部に耳掻きがつき、頸部にはガラス玉がはめこまれている。そのほか、桶の部材と思われる木片が多数出土している。これらの遺物から井戸２は19世紀中葉以降に営まれたものと判断できる。（金田）



第55図　井戸２出土遺物（1/4、1/3）

**井戸３**（第56図）

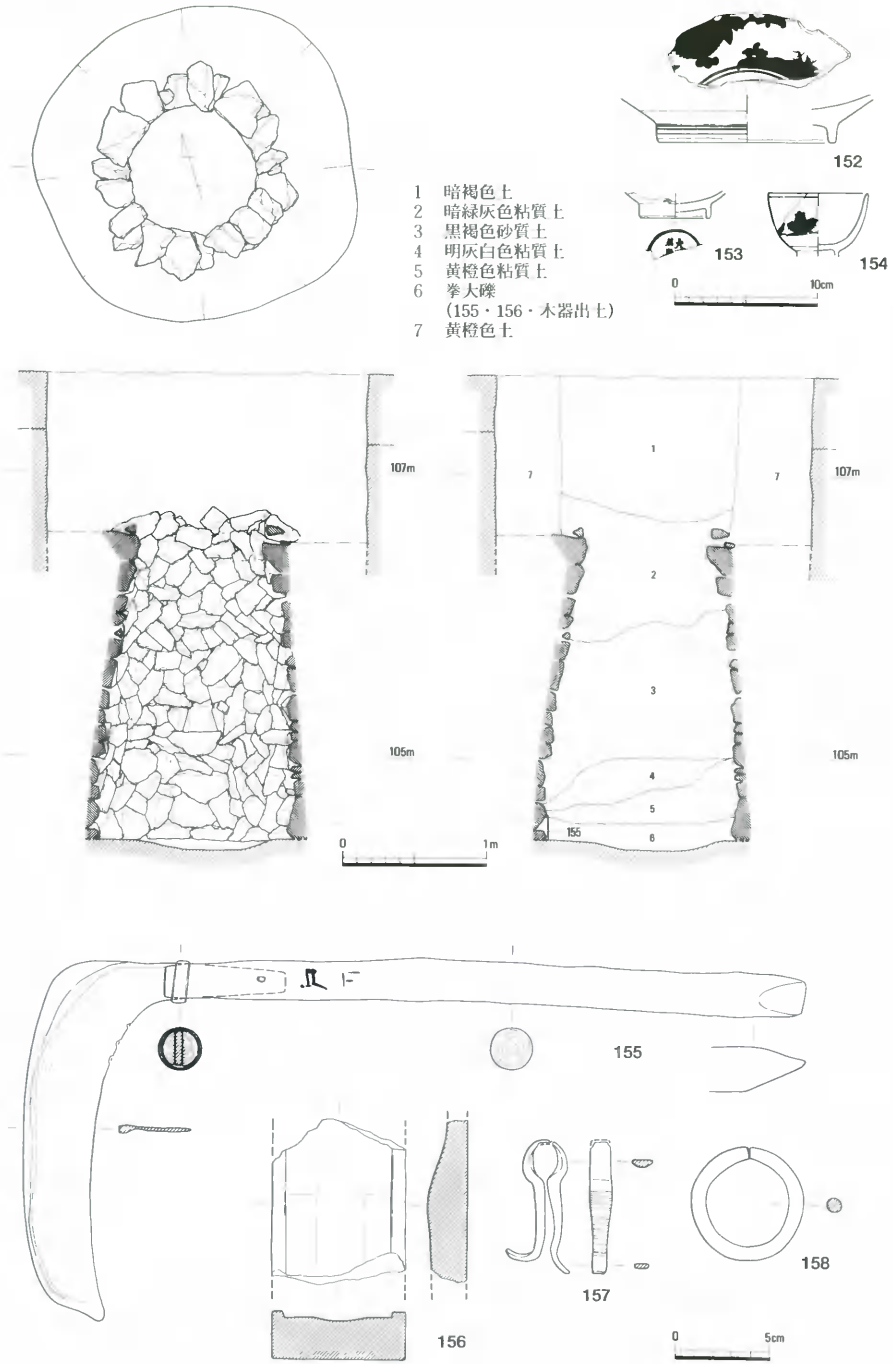
調査区北東隅付近に検出した石組み井戸である。遺構面から約１ｍまでは石組みがなく、木製の井側を入れていたことが土層から推定される。掘り方の検出面での径は約220㎝、土層からうかがえる上部の井側の径は約120㎝、石組み検出面での内径は約90㎝、底部での内径は約130㎝、遺構面から底部までの深さは約335㎝である。石組みは底部に向かって径を広げ、袋状をなしている。底部は中央をやや掘りくぼめ皿状を呈する。石組みの下には、井戸２に認められた丸太組みはない。石組みの状況は井戸２とは若干異なり、長方形の石材を斜めに組み合わせる手法が目立つ。また、井側内より竹の断片がいくらか出土した。井戸１と同様に竹を立てて埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物は少ないが、陶磁器、石硯、鉄器、木器がある。陶磁器は、19世紀後半のものが中心である。鎌（155）は井戸の底部に柄を上に向けて出土した。木製の柄は完全に遺存しており、端部を両側から斜めに切り落として「Ｖ」字形に加工している。また柄の一部に墨書が認められるが、判読不能である。石硯（156）は方形のもので陸部には使用によるくぼみが認められる。157は「Ω」字形の金具で木製品に取り付けられていたらしい。158は鉄環である。157・158ともに釣瓶に付属するものであろうか。そのほかに、桶の底と考えられる円盤状木製品や、釘を打ち付けた材木などがある。

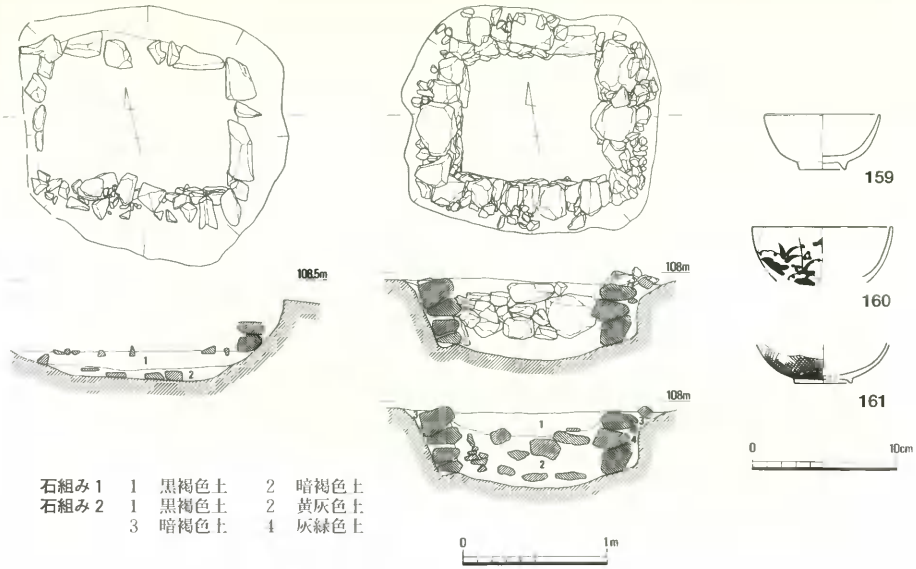
陶磁器の示す年代観から、井戸３は幕末期に築かれ明治期まで使用されたと考えられる。（尾上）

## ６．石組み（第57図）

土壙内に方形に石組みした遺構が２基検出されている。石組み１は内法で南北約80㎝、東西約120㎝、現状での深さ約60㎝を測る。石組み２はやや小さく、内法で南北、東西ともに約80㎝、現状での深さ約55㎝を測る。石組み１は上部を撹乱されているが、石組み２はよく残っている。石材は拳大以下から人頭大を超えるものまで様々であるが、小形の石材については小口積みする傾向が強い。石組み２の場合、側壁は最大で４段程度積まれている。機能については貯水槽や便槽などが考えられているが、本遺跡の場合、特に石組み１については、近世を通じて機能していたと考えられる道の上に存在しており、やや不自然なあり方をしている。時期については、石組み１から若干の磁器が出土しており、18世紀後半頃と推定できる。石組み２は出土遺物がほとんどなく、時期不明である。（尾上）




**第56図　井戸３および出土遺物（1/40、1/4、1/3）**



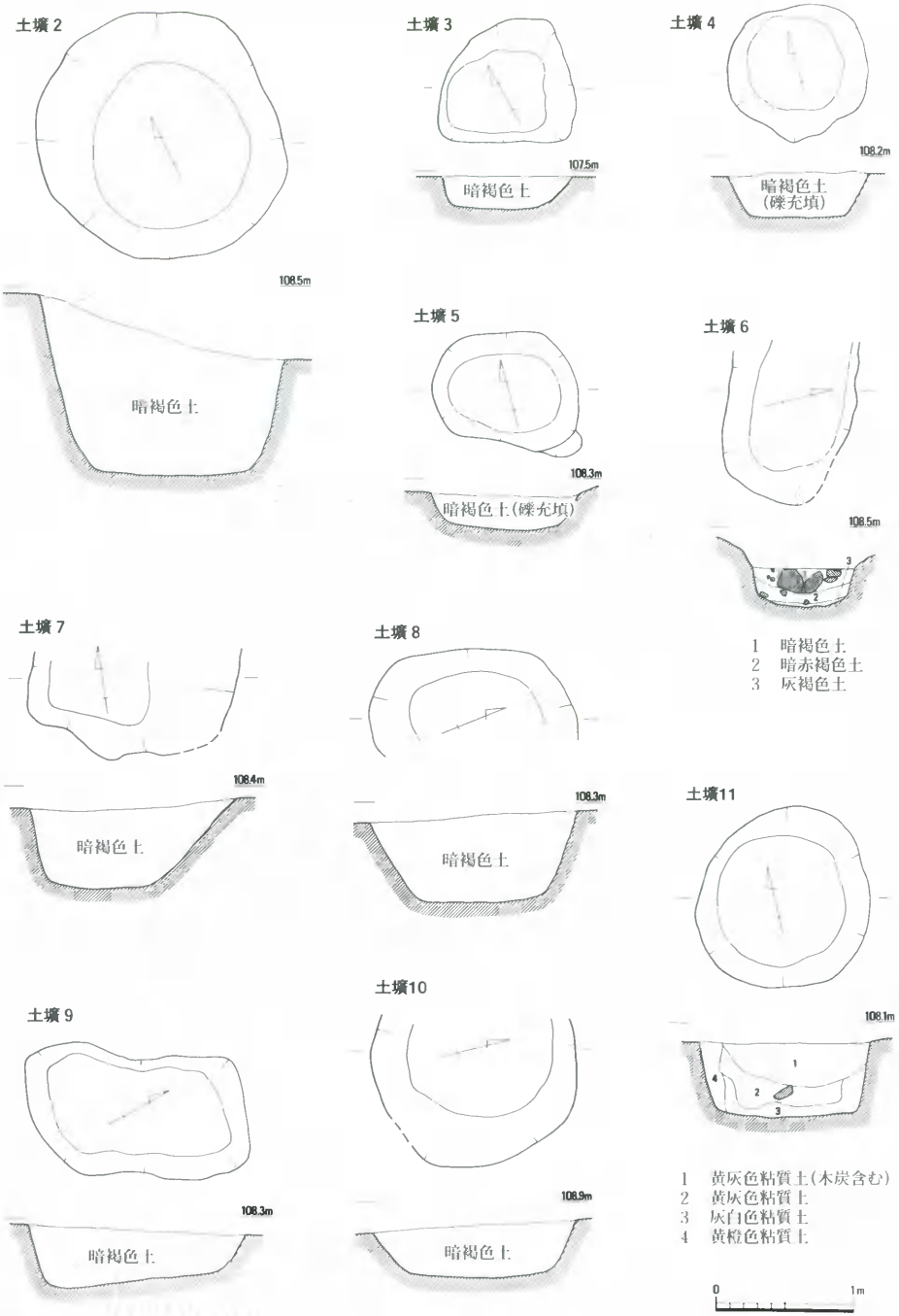

**第57図　石組み１(左)・２(右)および石組み１出土遺物（1/40、1/4）**

## ７．土　壙（第58～60図）

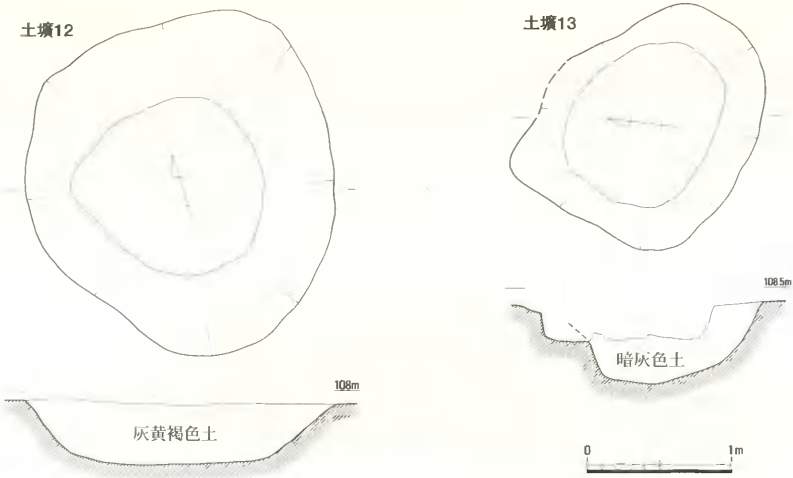
形態、規模等様々であるが、計12基の土壙が検出されている。検出箇所は、道の北辺部周辺および調査区北西部に偏る傾向が認められる。土壙の平面形は不整形なものがほとんどであるが、多くは円形を指向しているようである。断面形は逆台形で底部の平坦なものが多い。埋土は分層不可能なものが大部分であるが、土壙11では径80cm前後の桶が埋設されていたような土層の状況を示している。また、土壙４・５では拳大以上の大きさの礫を詰め込んだような状況を示しており（図版５－３・４）、土壙６についても多数の礫が認められた。これらの土壙の機能については不明であるが、ゴミ穴や水溜めなどが考えられる。

また、やや特殊なものとして土壙13が挙げられる。平面、断面とも不整形であり、上部を撹乱されているため不明確な部分も多いが、底部より銅銭６枚がまとまって出土している。互いに重なって出土しており（図版５－６）、中央の孔に紐を通していたものと思われる。出土した銅銭は第60図－174～179である。すべて寛永通宝であり、174が文銭で、他は新寛永銭と思われる。175～178は無背銭であるが、179は「元」の背文字がみられる。この６枚の銅銭は六道銭とも考えられ、墓としての機能が推定されるが、土壙の形態や、近世を通じて機能していたと考えられる道の上に存在することは、やや否定的な要素といわねばならない。墓ではないが、祭祀的な意味をもつものであろうか。

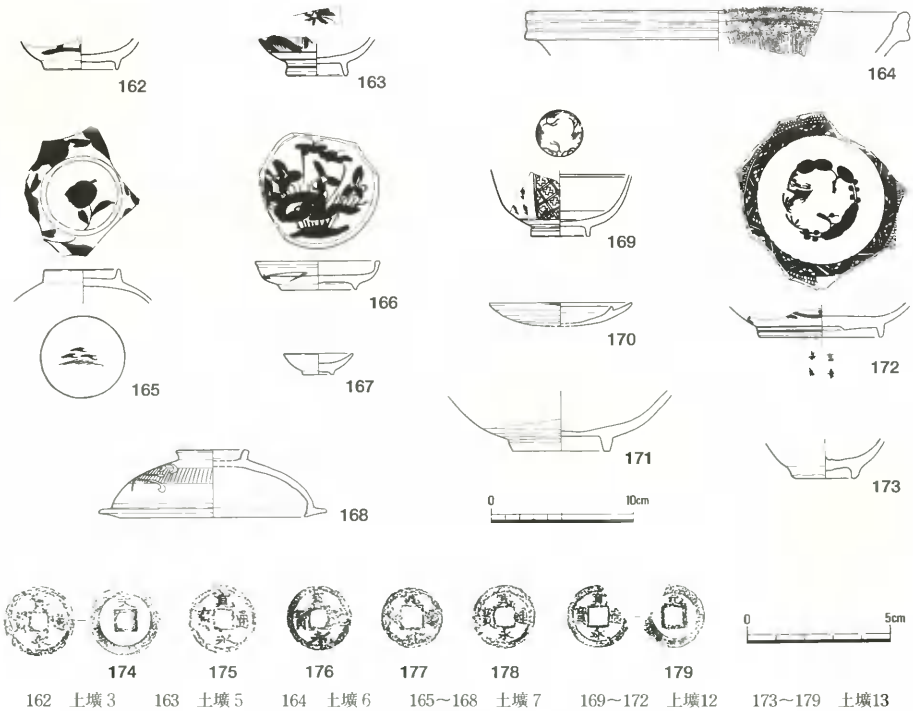
以上の土壙からの出土遺物はそれほど多くないが、第60図に示した陶磁器類から一応時期を推定すると、土壙３が17世紀後半以降、土壙５が19世紀中葉以降、土壙６が18世紀代以降、土壙７・12が19世紀代、土壙13が18世紀後半以降となる。ただし、ここに示した陶磁器は小さな破片も多く、遺構の時期を示しているかどうか疑わしいものが多い。また遺物の全く出土していない土壙もあり、中には近・現代まで降る時期のものも含んでいると思われる。（尾上）




第58図　土壙２～11（1/40）




第59図　土壙12・13（1/40）

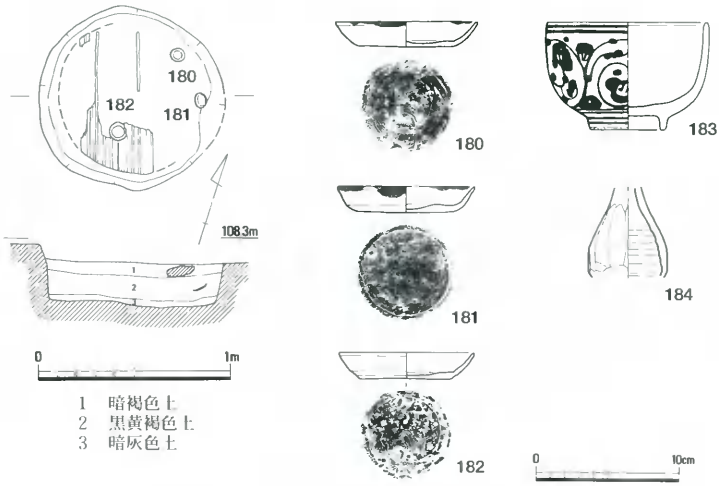



162　土壙３　163　土壙５　164　土壙６　165～168　土壙７　169～172　土壙12　173～179　土壙13

第60図　土壙出土遺物（1/4、1/2）

## ８．木棺墓（第61図）

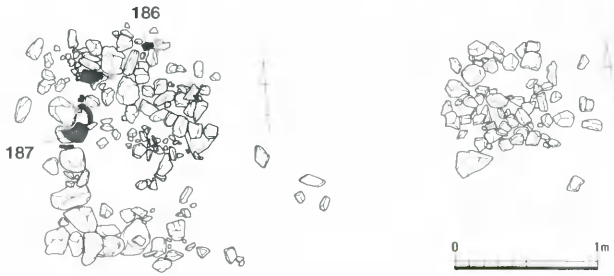
調査区北西部より検出した。径約１ｍの土壙に木桶を配置した墓である。底板が２枚残存していたが、側板は検出できなかった。出土遺物として、陶器、土師質皿が出土した。土師質皿（180～182）は第２層より出土し、いずれも完形で出土した。陶器（183・184）は第１層より出土し、いずれも破損していた。また、第１層では約15㎝の礫も検出されていることなどから、第１層に相当する部分は、木棺墓の上部が落ち込み、流れ込んだことにより形成されたと推測できる。これらの成果から木棺墓は17世紀後半から18世紀前半を中心とする時期に営まれたものと考えられる。（金田）




**第61図　木棺墓および出土遺物（1/30、1/4）**

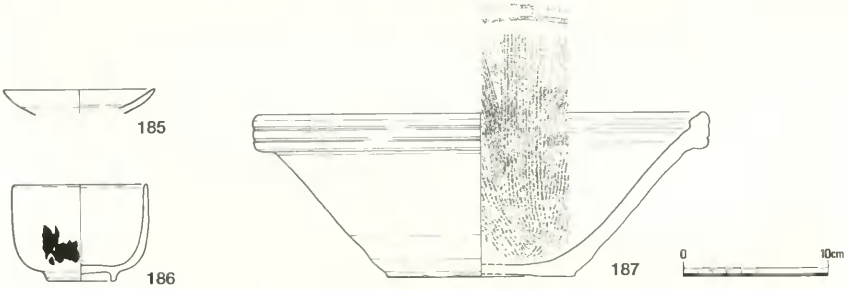
## ９．集　石（第62・63図）

調査区北西部で検出した集石遺構である。集石１は、幾分石が散乱した様相をなすものの南北約120㎝、東西約100㎝の長方形を呈する遺構である。10～20㎝ほどの礫を配し、その中に混じって土師質皿や陶器類が破片の状態で出土した（第62図）。185は土師質皿、186は肥前陶器、187は備前焼摺鉢である。これらの遺物から集石１は18世紀につくられたものと考えられる。また、集石２は一辺約70




**第62図　集石１（左）・２（右）（1/40）**

cmの方形を呈する。これも20～30cmほどの礫を使用している。出土遺物はない。これらの集石遺構は、調査区北端の斜面上に位置し、ちょうど屋敷地の裏地に相当する場所であるが、遺構の詳細な性格は不明である。（金田）




**第63図　集石１出土遺物（1/4）**

| 図番号 | 出土遺構 | 器　種 | 装飾技法など | 素地色 | その他の特徴 | 製作地 | 製作年代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 74 | 柱穴列３ | 皿 | 内外面灰オリーブ色釉 | にぶい橙 | 砂目、底部糸切り | 肥前 | 17C前半 |
| 75 | 柱穴列５ | 椀 | 内外面灰色釉 | にぶい赤褐 | 砂目、削出高台 | 肥前 | 1600～1630年代 |
| 76 | 柱穴列７ | 椀 | 内外面藁灰釉（明青灰色） | にぶい赤褐 | 削出高台 | 肥前 | 1580～1600年代 |
| 77 | 柱穴列９ | 摺鉢 | | 赤褐 | | 備前 | 17C |
| 79 | 溝２ | 壺または土瓶 | 外面灰オリーブ色釉 | 灰 | | 関西 | 19C |
| 82 | 溝５ | 灯明皿 | | にぶい赤褐 | 底部削り | 備前 | |
| 98 | 溝４ | 行平鍋 | 陰刻文、鉄泥、把手変形字銘 | にぶい橙 | | 関西 | 19C後半 |
| 99 | 溝４ | 土瓶の蓋 | 外面灰白色釉、絵付 | にぶい赤褐 | | 関西 | 19C |
| 100 | 溝４ | 橋のミニチュア | 表面褐色釉 | 橙 | 裏面布目、墨書 | 関西 | 19C |
| 101 | 溝４ | 摺鉢 | | 赤褐 | | 備前 | 19C |
| 106 | 溝８ | 皿 | 内外面淡黄色釉、褐色象嵌文 | 浅黄 | 砂目 | 肥前・内野山窯 | 17C前半 |
| 108 | 溝８ | 椀 | 陶胎染付（灰色釉） | 灰 | | 肥前 | 17C後半～18C前半 |
| 110 | 溝11 | 皿 | 灰色釉 | にぶい橙 | 胎土目、削出高台 | 肥前 | 1590～1610年代 |
| 111 | 溝14 | 皿 | 内外面灰白色釉 | 灰黄 | | 肥前 | 17C前半 |
| 112 | 溝14 | 皿 | 内外面青緑釉 | 灰白 | 蛇ノ目釉剥ぎ | 肥前・内野山窯 | 17C末～18C前半 |
| 124 | 井戸１ | 皿 | 内外面暗オリーブ色釉、鉄絵 | 暗灰黄 | 胎土目、削出高台 | 肥前 | 1590～1610年代 |
| 125 | 井戸１ | 皿 | 内外面暗オリーブ色釉 | 灰黄 | 胎土目、削出高台 | 肥前 | 1590～1610年代 |
| 126 | 井戸１ | 皿 | 内外面暗オリーブ色釉 | 褐 | 削出高台 | 肥前 | 1620～1630年代 |
| 127 | 井戸１ | 椀 | 内外面灰釉 | 灰 | | 肥前 | 1600～1630年代 |
| 131 | 井戸１ | 摺鉢 | | 灰赤 | 内面磨耗顕著 | 備前 | 17C |
| 132 | 井戸１ | 皿 | 内外面灰白色釉 | にぶい黄橙 | 削出高台 | 肥前 | 1590～1630年代 |
| 164 | 土壙６ | 摺鉢 | | 黄灰 | | 備前 | |
| 168 | 土壙７ | 行平鍋の蓋 | 陰刻文、鉄泥、灰白色線状文 | にぶい褐 | | 関西 | 19C |
| 170 | 土壙12 | 灯明皿 | | にぶい赤褐 | 口縁煤、底部削り | 備前 | |
| 171 | 土壙12 | 皿 | 内外面黒褐色釉、灰白色文様 | にぶい赤褐 | 見込蛇ノ目釉剥ぎ | 肥前 | 18C |
| 183 | 木棺墓 | 椀 | 陶胎染付（灰色釉） | 灰 | | 肥前 | 17C末～18C初頭 |
| 184 | 木棺墓 | 瓶 | 灰白色釉 | 灰黄 | 外面面取り | 関西 | 18～19C |
| 186 | 集石１ | 椀 | 内外面浅黄色釉、呉須絵 | 淡黄 | | 肥前 | 17C後半 |
| 187 | 集石１ | 摺鉢 | | にぶい赤褐 | 火襷あり | 備前 | 17～18C |

**第２表　近世陶器観察表（土師質土器皿を除く）**

| 図番号 | 出土遺構 | 器　種 | 装飾技法など | 胎土色 | 釉　色 | 銘　な　ど | 製　作　地 | 製　作　年　代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 78 | 溝１ | 碗 | 白磁 | 白 | 白 | | 瀬戸・美濃～関西 | 19Ｃ後半 |
| 80 | 溝３ | 皿 | 外面青磁、内面染付 | 灰白 | 明緑灰 | | 肥前 | 18Ｃ後半 |
| 83 | 溝４ | 碗の蓋 | 染付 | 灰白 | 明灰 | 輪状摘み内変形字銘 | 関西 | 1820～1860年代 |
| 84 | 溝４ | 碗 | 染付 | 灰白 | 灰白 | | 肥前 | 1820～1860年代 |
| 85 | 溝４ | 碗 | 染付 | 白 | 明緑灰 | | 瀬戸・美濃 | 19Ｃ後半 |
| 86 | 溝４ | 杯 | 染付 | 白 | 白 | 外側面「是歳十月之望<br>歩自雪□□□□」<br>高台内「玩品」 | 瀬戸・美濃～関西 | 19Ｃ後半 |
| 87 | 溝４ | 杯 | 色絵（紺） | 灰白 | 灰白 | 見込「勝利凱□」<br>高台内「大森」 | 瀬戸・美濃 | 19Ｃ後半 |
| 88 | 溝４ | 杯 | 見込色絵（紺）<br>高台・高台内染付 | 白 | 白 | 見込「イツカツ」？<br>高台内変形字銘 | 瀬戸・美濃～関西 | 明治 |
| 89 | 溝４ | 杯 | 色絵（紺） | 灰白 | 灰 | | 瀬戸・美濃 | 19Ｃ後半 |
| 90 | 溝４ | 蓋合 | 染付 | 灰白 | 灰白 | | 関西 | 19Ｃ |
| 91 | 溝４ | 皿 | 染付 | 灰白 | 灰白 | | 肥前・志田窯 | 1820～1860年代 |
| 92 | 溝４ | 皿 | 染付 | 灰 | 灰 | 高台内「成化年製」 | 肥前 | 19Ｃ初頭～幕末 |
| 93 | 溝４ | 皿 | 染付 | 灰 | 灰 | 見込「富貴長命」<br>高台内変形字銘 | 関西 | 1820～1860年代 |
| 94 | 溝４ | 皿 | 染付、陽刻文 | 灰白 | 灰白 | | 瀬戸・美濃 | 19Ｃ後半 |
| 95 | 溝４ | 皿 | 白磁、陽刻文 | 白 | 灰白 | | 瀬戸・美濃 | 19Ｃ後半 |
| 96 | 溝４ | 神酒徳利 | 染付 | 灰白 | 灰白 | | 肥前 | 19Ｃ初頭～幕末 |
| 97 | 溝４ | 瓶 | 染付 | 灰 | 緑灰 | | 肥前 | 18Ｃ後半～19Ｃ前半 |
| 102 | 柱穴列11 | 杯 | 白磁 | 白 | 白 | | 肥前 | 17Ｃ後半 |
| 103 | 柱穴列11 | 碗 | 染付 | 灰 | 灰 | | 肥前 | 1610～1630年代 |
| 104 | 柱穴列12 | 杯 | 見込色絵<br>高台・高台内染付 | 白 | 灰白 | 高台内変形字銘 | 瀬戸・美濃～関西 | 幕末 |
| 105 | 柱穴列15 | 碗 | 染付 | 灰白 | 明緑灰 | | 肥前 | 1630～1640年代 |
| 107 | 溝８ | 皿 | 染付 | 灰白 | 灰白 | | 肥前・波佐見系 | 18Ｃ後半 |
| 109 | 溝８ | 皿 | 青磁、見込菊花陰刻文 | 灰白 | 明オリーブ灰 | | 肥前 | 18Ｃ前半 |
| 115 | 溝14 | 碗 | 染付 | 灰白 | 白 | | 肥前 | 17Ｃ後半～18Ｃ初頭 |
| 128 | 井戸１ | 碗 | 染付、ヘラ彫り装飾 | 灰白 | 明緑灰 | 外側面「福寿」 | 肥前 | 1620～1630年代 |
| 129 | 井戸１ | 碗 | 染付 | 灰白 | 明緑灰 | | 中国・福建省系 | 1590～1630年代 |
| 130 | 井戸１ | 碗 | 染付 | 灰白 | 灰白 | | 中国・景徳鎮 | 1590～1630年代 |
| 149 | 井戸２ | 碗 | 染付 | 灰白 | 明緑灰 | | 瀬戸・美濃？ | 1820～1860年代 |
| 152 | 井戸３ | 皿 | 染付 | 白 | 明緑灰 | | 瀬戸・美濃？ | |
| 153 | 井戸３ | 碗 | 外側面色絵（黒・赤）<br>高台内染付 | 白 | 灰白 | 高台内「大(明成)化年(製)」 | | |
| 154 | 井戸３ | 碗 | 染付 | 白 | 明緑灰 | | 瀬戸・美濃 | 19Ｃ後半 |
| 159 | 石組み１ | 碗 | 白磁 | 灰白 | 灰白 | | 肥前 | 18Ｃ前葉～中葉 |
| 160 | 石組み１ | 碗 | 染付 | 灰白 | 明緑灰 | | 肥前 | 18Ｃ中葉 |
| 161 | 石組み１ | 碗 | 染付 | 灰白 | 明緑灰 | | 肥前 | 18Ｃ後半 |
| 162 | 土壙３ | 碗 | 染付 | 灰白 | 灰白 | | 肥前 | 17Ｃ後半 |
| 163 | 土壙５ | 碗 | 染付 | 灰白 | 灰白 | | 肥前 | 1820～1860年代 |
| 165 | 土壙７ | 碗の蓋 | 染付 | 灰白 | 灰白 | | 肥前 | 19Ｃ前半 |
| 166 | 土壙７ | 手塩皿 | 染付 | 灰白 | 明緑灰 | | 肥前 | 18Ｃ |
| 167 | 土壙７ | 杯 | 白磁 | 灰白 | 白 | | 肥前 | 18Ｃ |
| 169 | 土壙12 | 碗 | 染付 | 灰白 | 白 | | 肥前 | 1820～1860年代 |
| 172 | 土壙12 | 皿 | 染付 | 灰白 | 灰白 | 高台内「富貴長春」 | 肥前 | 19Ｃ初頭～幕末 |
| 173 | 土壙13 | 瓶 | | 白灰 | 明緑灰 | | 肥前 | 18Ｃ中葉～19Ｃ初頭 |

**第３表　近世磁器観察表**

# 第５章　ま　と　め

今回の発掘調査の結果、十六夜山古墳のほかに、弥生時代、古代、中世、近世という幅広い時代の遺構、遺物が確認された。調査の中心となったのは、墳長約60ｍの前方後円墳であることが判明した十六夜山古墳および近世津山城下町関連遺構である。以下ではこの２者について、まとめと若干の考察を行っておきたい。

## 第１節　十六夜山古墳の築造年代と評価

### 十六夜山古墳の築造年代

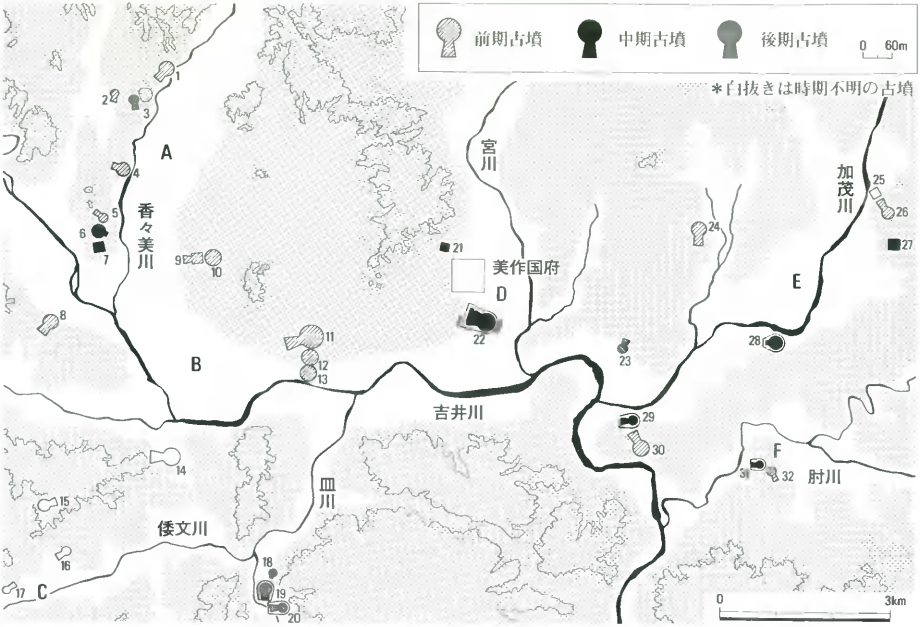
十六夜山古墳の築造年代について、円筒埴輪から考えてみたい。十六夜山古墳の円筒埴輪については第４章第３節（p.18～23）にまとめたとおりであるが、外面調整では横ハケと縦ハケの混在期で、底部調整を伴う段階であると理解できる。川西編年[1]のⅤ期の古相に相当すると考えられる。

次に、実年代を検討するため、津山市周辺で円筒埴輪と須恵器が共伴している例と比較してみたい。津山市才ノ峪１号墳[2]では、出土数があまり多くないが、外面二次調整をすべて省略した縦ハケのものはなく、底部調整は施されているようである。十六夜山古墳とほぼ同じかやや古い様相である。須恵器はＴＫ23～47型式[3]に相当する。美作町北山１号墳[4]では、多数の円筒埴輪が出土しているが、ほとんどの個体が二次調整を行わない縦ハケのもので、横ハケが認められるのは１個体のみである。十六夜山古墳より新しい様相を示す。須恵器はＭＴ15型式のものである。津山市河辺上原１号墳[5]では、数個体の破片しか出土していないが、いずれも外面縦ハケのもので、これも十六夜山古墳より新しい。須恵器はＭＴ15型式に相当する。以上の例から十六夜山古墳の円筒埴輪はＴＫ23～47型式頃、その中でもやや新しい時期と考えられる。一般的な実年代観によればおよそ５世紀末葉頃とすることができよう。

### 津山盆地における十六夜山古墳の位置

５世紀末葉という十六夜山古墳の築造年代をふまえ、その位置付けと評価を行ってみたい[6]。津山盆地周辺の主な首長墳について、第64図に分布を示した。吉井川とそれに注ぐ大小の河川流域にいくつもの小盆地が形成されており、古墳時代の首長墓はこれらの盆地を取り巻く丘陵上に分布している。その分布は、香々美川流域（Ａ）、吉井川・香々美川合流地域（Ｂ）、倭文川流域（Ｃ）、吉井川・宮川合流地域（Ｄ）、加茂川流域（Ｅ）、肘川流域（Ｆ）などに分けられるであろう[7]。そのほかに後期古墳が群集する佐良山地域などがある。

古墳時代前期には多数の前方後円（方）墳が認められ、大規模なものとして美和山１号墳[8]や日上天王山古墳[9]などが挙げられる。各地域に点々と築かれているが、十六夜山古墳の所在するＤ地域には目立ったものがない。つづいて中期前半には、津山盆地周辺に明確な前方後円墳はみられず、この時期に途絶えるようである。代わって伊勢領方墳[10]、河面丸山１号墳[11]といった大規模方墳が築かれている。Ｄ地域の下道山南古墳[12]も規模はやや小さいが、この時期の首長墓と考えられる方墳である。この現象は、同時期の岡山県南部において造山古墳以外の大規模前方後円墳が途絶え、大規模方墳が築かれることと関連する可能性がある[13]。中期後半ないし末頃になると再び前方後円墳が築造されるようになる。いずれも周濠をもつものである。十六夜山古墳をはじめ、Ｅ地域の井口車塚古墳[14]、Ｅ




1　赤峪古墳　2　土居妙見山古墳　3　土居天王山古墳　4　竹田妙見山古墳　5　古川3号墳
6　伊勢領大塚古墳　7　伊勢領方墳　8　郷観音山古墳　9　田邑丸山2号墳　10　田邑丸山1号墳
11　美和山1号墳　12　美和山2号墳　13　美和山3号墳　14　狐塚古墳　15　観音免2号墳
16　瓢箪山1号墳　17　丸尾瓢箪山古墳　18　中宮1号墳　19　高野山根1号墳　20　高野山根2号墳
21　下道山南古墳　22　十六夜山古墳　23　玉淋大塚古墳　24　正仙塚古墳　25　近長四つ塚1号墳
26　近長四つ塚2号墳　27　河面丸山1号墳　28　井口車塚古墳　29　日上畝山80号墳　30　日上天王山古墳
31　茶山1号墳　32　一貫東1号墳

**第64図　津山盆地における主要首長墳の分布（1/100,000）**

地域の出口にあたる日上畝山80号墳、F地域の茶山1号墳などがあり、佐良山地域の高野山根1号墳もこの時期にさかのぼる可能性がある。中でも十六夜山古墳の規模は他を大きく凌駕している。後期には佐良山地域をはじめ、少数ながら前方後円墳が分布している。

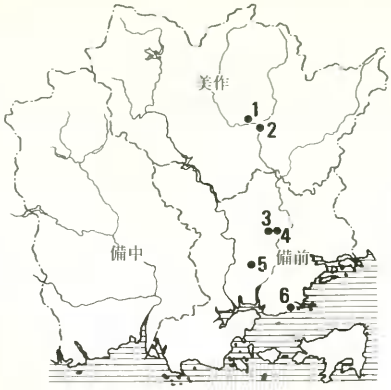
このようにみてくると、十六夜山古墳はD地域において先行する大首長墳がなく突如として出現し、また後に続く首長墳も明確でなく孤立した状況にある。そのような意味で、十六夜山古墳の築造にあたっては何らかの外部からの働きかけが想定され、地方では例の少ない二重周濠や石見型盾形埴輪などにみられるように、畿内政権との関係も考えなければならないだろう。

**吉備における十六夜山古墳の位置**

さらに視野を広げ、吉備地域の動きの中でみてみたい。吉備の中枢部である備中南部勢力が、5世紀前半から中葉にかけて造山（約360ｍ）、作山（約286ｍ）という他の追随を許さない巨墳を造営した後、5世紀後半には備前の両宮山古墳（約192ｍ）、備中南部の宿寺山古墳（約118ｍ）という2基の大規模前方後円墳が出現する。これについては吉備政権の両極分解とみる意見がある。また両墳の規模の差を重視すれば、備前、備中両地域の相対的な地位が、この時期にあたかも逆転したかのようにみえる。これ以降も、備前では砂川中流域（山陽町域）や邑久郡地域などに比較的多くの前方後円墳が築造されるのに対し、備中南部では非常に少なくなる。一方美作では、十六夜山古墳以下、中

小規模の前方後円墳が継続して営まれ、備中に比べるとその数は多いといえる。吉備各地の前方後円墳が規模を著しく縮小する5世紀後葉にあっては、十六夜山古墳は吉備地方でも最大規模の古墳のひとつとなっている。

さらに、十六夜山古墳から出土した石見型盾形埴輪に注目したい。石見型盾形埴輪は、畿内周辺地域に集中して分布することが知られており、この時期の畿内の埴輪祭祀を特徴づけるものとされている[13]。岡山県内では6遺跡から出土している（第65図）。津山市十六夜山古墳、同日上畝山古墳群[14]、熊山町前内池4号墳[15]、同円光寺遺跡[16]、瀬戸町玉井山相遺跡[17]、牛窓町二塚山古墳[18]である。その型式や共伴遺物から前4者がほぼ同時期で5世紀末から6世紀前葉頃、後2者はやや新しく6世紀中葉以降のものと考えられる。これらは吉備の東辺部に偏って分布しており、備中地域では現在のところ確認されていない。この分布状況を上の前方後円墳の分布と重ね合わせれば、備前、美作地域が、畿内政権との関わりの中で、相対的に地位を高めてきた可能性が指摘できる。その後6、7世紀の横穴式石室の地域性のあり方[19]や、陶棺の分布状況[20]なども、これらのことを否定するものではない。その背景については今後の課題としたいが、畿内政権の地方政策に関わる問題といえよう。いずれにしても十六夜山古墳は以上のような動きの中で、津山盆地中央部に出現した大規模前方後円墳と位置付けることができる。十六夜山古墳の位置するD地域において、のちに美作国府が造営されることも、このような動きと無関係ではないだろう。（尾上）




1　十六夜山古墳　　2　日上畝山古墳群
3　前内池4号墳　　4　円光寺遺跡
5　玉井山相遺跡　　6　二塚山古墳

**第65図　岡山県内石見型盾形埴輪の分布**

**註**

(1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　1978
(2) 中山俊紀『才ノ峪古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集　1988
(3) 型式名は、田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981　による。
(4) 松本和男ほか「北山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』2　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4　1973
(5) 小郷利幸編『河辺上原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集　1994
(6) 十六夜山古墳の位置付けについては、すでに古市秀治氏が行っており、本稿と重複する内容がある。合わせて参照していただければ幸いである。古市秀治「十六夜山古墳」『津山高校百年史』津山高等学校同窓会　1995
(7) 倉林眞砂斗氏の業績に負うところが大きいが、若干の私見を加えている。倉林眞砂斗「美作地方における政治勢力と諸関係」『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集　1997
(8) 中山俊紀『史跡美和山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集　1992
(9) 近藤義郎・倉林眞砂斗・澤田秀実編『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集　1997
(10)(11) 土居徹・河本清「美作の方墳」『古代吉備』第7集　1971
(12) 栗野克己・岡本寛久『下道山遺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17　1977
(13)(22) 葛原克人「大古墳」『吉備の考古学』福武書店　1987
(14) 小郷利幸『井口車塚古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集　1994

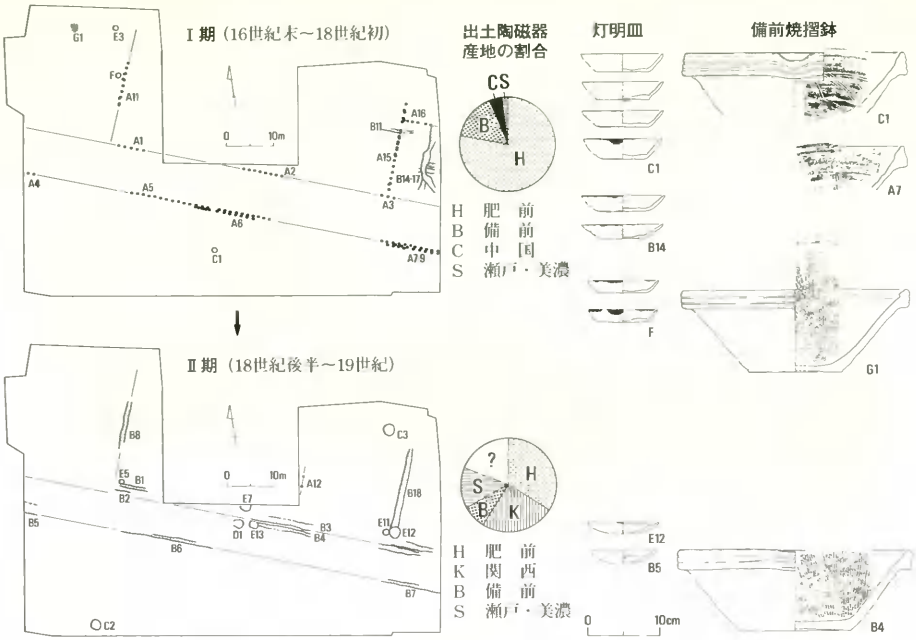
(15) 河本清「日上畝山古墳群」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986
(16) 保田義治『茶山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集　1989
(17) 近藤義郎編『佐良山古墳群の研究』第１冊　1952
(18) 西川宏「造山古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986
(19) 葛原克人「作山古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986
(20) 西川宏「両宮山古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986
(21) 西川宏「宿寺山古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986
(23) 楠元哲夫「大和における盾形埴輪の系譜」『岩室池古墳・平等坊・岩室遺跡』天理市埋蔵文化財調査報告第２集　1985、鐘方正樹「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題・石見型埴輪の検討」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』1991、吉田野々「石見型盾形埴輪について」『長岡京古文化論叢』Ⅱ　1992　ほか
(24) 津山郷土博物館に展示。津山郷土博物館『常設展示解説・美作の歴史と文化』1989
(25) 岡山県古代吉備文化財センターが1997年度に調査。調査現場にて実見させていただいた。
(26) 鎌木義昌「人物埴輪を出土する備前、円光寺遺跡」『考古学雑誌』第41巻第４号　1956
(27) 松本和男・山磨康平「玉井山相遺跡・茂登大塚古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』17　1987、山磨康平「玉井山相遺跡」『吉備－大地からのメッセージ－』岡山県立博物館　1997、瀬戸町教育委員会のご厚意により実見させていただいた。
(28) 亀田修一「二塚山古墳」『牛窓町史』資料編Ⅱ　考古、古代・中世、近世　1997
(29) 亀山行雄「ミニシンポジウム記録・吉備の横穴式石室　岡山県内の横穴式石室」『考古学研究』第44巻第２号　1997
(30) 村上幸雄「陶棺について」『稼山遺跡群』Ⅱ　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980

## 第２節　近世の遺構・遺物の変遷について

近世の遺構は多数検出されており、津山城下町に関連する遺構である。近世の絵図によれば、調査地点は武家屋敷域の北端部分にあたる。検出された遺構は、絵図にも認められる幅約９ｍの道を中心に、それに直交、平行する形で町割り、屋敷割りの柱穴列や溝が認められる。建物はおそらく礎石建物と想定され、後世に削平されたと考えられる。ほかに井戸、土壙など多数の遺構が検出された。

出土陶磁器の年代観に従えば、検出された遺構は大きく２時期に分けられる。それぞれをⅠ期、Ⅱ期とすると、Ⅰ期は16世紀末から18世紀初め頃、Ⅱ期は18世紀後半から19世紀頃である。その間には約半世紀の空白期があり、この時期居住者がいなかった可能性がある。その背景は明らかでないが、津山藩が10万石から５万石に減封された際（1726年）に浪人となり、再び10万石に復した際（1817年）に帰参を許された藩士がいたことなどと関連している可能性がある。仮にそうだとすれば、出土陶磁器の示すⅠ期、Ⅱ期の年代観と若干矛盾が生じるが、陶磁器の使用期間の長さを考えればむしろ一致するのかもしれない。正徳期（1711～16年）の絵図に居住者の氏名が記されていることを考えても、実際の遺構の年代はやや下げて考えたほうがよいであろう。

遺構の実年代の変動は考えなければならないが、この２時期区分に従って、以下、遺構・遺物の変遷をみることにする（第66図）。まず遺構についてであるが、町割りの区画において、Ⅰ期とⅡ期とで大きく景観を変えていることが指摘できる。Ⅰ期には主として柱穴列、おそらく板塀によって区画されていたものが、Ⅱ期には溝による区画となる。Ⅰ期の柱穴列とⅡ期の溝の位置はほぼ一致することから、区画の位置は踏襲しながら、その方法を変えているようである。また調査区中央を東西に走る道の幅は、Ⅰ期には９ｍあるが、Ⅱ期には幅を減じる。Ⅱ期の中でも、溝３→溝４という前後関係




**第66図　近世の遺構・陶磁器の変遷（遺構1/1,200、遺物1/8）**

から次第に幅を減じたことが確認できる。また井戸は素掘りから石組みに変化している。

次に陶磁器であるが、第66図の中央に産地の割合を円グラフで示している。報告書に掲載したもののほか未掲載のものも若干加えている。Ⅰ期には肥前系が大部分でそれに備前焼が加わる程度である。その他、中国製２点、織部焼１点がみられる。Ⅱ期では、Ⅰ期に続いて肥前系が多いが、関西系、瀬戸・美濃系の陶磁器が急増し、多様な産地の製品がみられるようになる。陶磁器の流通状況の変化を示していると考えられる。次に灯明皿であるが、Ⅰ期には土師質の皿が使用され、時期が降るにしたがって浅く小形化していく。Ⅱ期になるとこのような皿は姿を消し、口縁部内面に灯芯受けの突帯をもつ備前焼の灯明皿が使用される。この変化は岡山城「二の丸跡」で指摘されている状況とほぼ一致するが、土師質皿については本遺跡の方が同時期の法量の規格性が高い。摺鉢はほぼ一貫して備前焼が使用されるが、内面の櫛目の粗いものから密なものへ、片口部の大きなものから小さなものへ変化しており、上方へ摘み上げる口縁形態のものから丸みを帯びた三角形断面のものに変化する。

近世陶磁器類の使用期間の長さのためか、同一遺構内から出土するものにもかなりの製作年代幅があり、遺構・遺物の変遷を厳密に検討することは難しいが、大筋において以上のような変遷が追えると思われる。

（尾上）

**註**

(1) 津山郷土博物館蔵　津山郷土博物館『常設展示解説・美作の歴史と文化』1989

(2) 柳瀬昭彦・宇垣匡雅編『岡山城「二の丸跡」』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告78　1991

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | いざよいやまこふん・いざよいやまいせき |
| 書名 | 十六夜山古墳　・十六夜山遺跡 |
| 副書名 | 県立津山高等学校校舎改築に伴う発掘調査 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 |
| シリーズ番号 | 130 |
| 編著者名 | 尾上　元規・金田　善敬 |
| 編集機関 | 岡山県古代吉備文化財センター |
| 所在地 | 〒701－0136　岡山県岡山市西花尻1325－3　TEL086－293－3211 |
| 発行機関 | 岡山県教育委員会 |
| 所在地 | 〒700－0824　岡山県岡山市内山下2－4－6　TEL086－224－2111 |
| 発行年月日 | 西暦1998年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| いざよいやまこふん<br>十六夜山古墳<br>いざよいやまいせき<br>十六夜山遺跡 | おかやまけんつやましつばきこうげ<br>岡山県津山市椿高下62 | 33203 | | 35度<br>3分<br>51秒 | 134度<br>0分<br>15秒 | 1993.8.2～<br>8.23<br>1994.10.3～<br>11.1<br>1995.9.1～<br>12.15<br>1997.4.1～<br>5.30 | 4,080 | 県立津山高等学校校舎改築 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 十六夜山古墳 | 古墳 | 古墳時代 | 古墳　1基 | 埴輪・須恵器 | ・墳長約60ｍ、二重周濠を伴う前方後円墳 |
| 十六夜山遺跡 | 集落 | 弥生時代 | 竪穴住居　3～4軒<br>土壙　1基 | 弥生土器・石器・土製品 | ・石見型盾形埴輪ほか多数の埴輪出土 |
| | | 古代 | | 須恵器・土師器・瓦 | |
| | | 中世 | 柱穴列　2条 | | |
| | | 近世 | 道　1条<br>柱穴列　7条<br>溝　11条<br>井戸　3基<br>石組み　2基<br>土壙　15基<br>木棺墓　1基<br>集石　2基 | 陶磁器・土師質土器・漆器・銅銭・鉄器・銅器・簪・砥石・動物遺体 | ・近世武家屋敷関連遺構 |

1　遺跡遠景
（南東、津山城より）

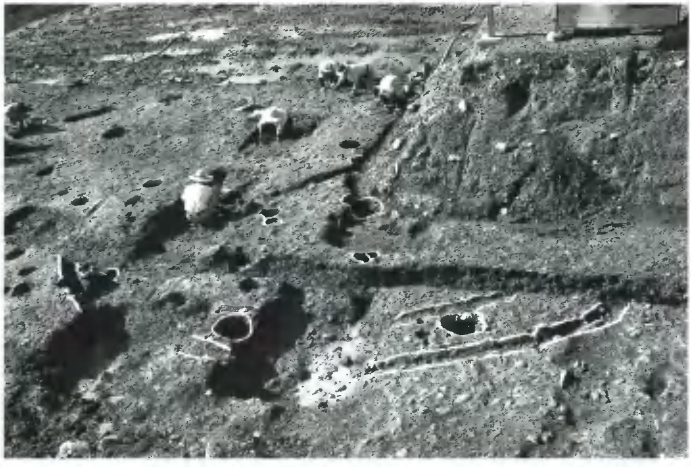
2　第１次確認調査
Ｔ１Ｗ竪穴住居
（西より）

3　第２次確認調査
十六夜山古墳内濠
埴輪出土状況

図版 2

1　第 2 次確認調査
十六夜山古墳
二重周濠
（前方部前面より、
背景は後円部残丘）

2　竪穴住居 1
（南西より）



1　竪穴住居 2
（南より）

2　土壙 1
（北西より）

3　近世の道
（東より）

図版 4

1　柱穴列15・16ほか（南より）

2　溝11（北東より）

3　溝13～17（南より）

4　井戸１（南より）

5　井戸２（北より）

6　井戸２底部（北より）

7　井戸３（南より）

1　石組み１（北より）

2　石組み２（南より）

3　土壙４（南西より）

4　土壙５（東より）

5　土壙11（南より）

6　土壙13底部銅銭出土状況（東より）

7　木棺墓（南より）

8　集石１（東より）

1　竪穴住居 2 出土土器（1/3）

2　弥生時代の石器・土製品（1/3）

3　十六夜山古墳出土埴輪(1)（1/5）

16

24

27

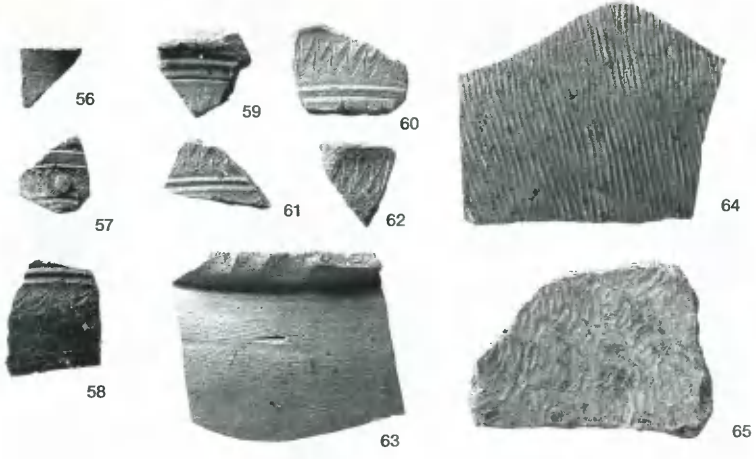
28

29～34

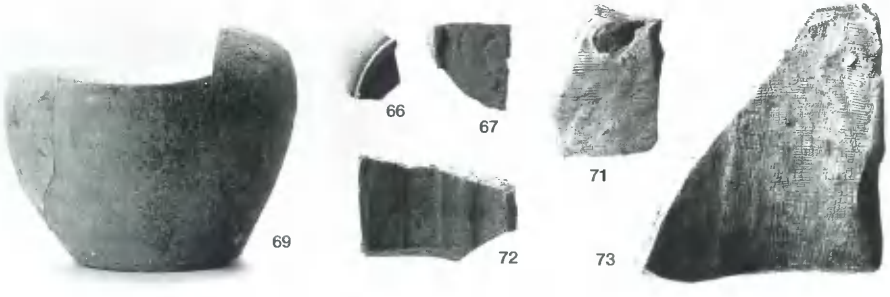
35

十六夜山古墳出土埴輪(2)（1/5）

十六夜山古墳出土埴輪(3)（1/5、右下 7 点1/4）

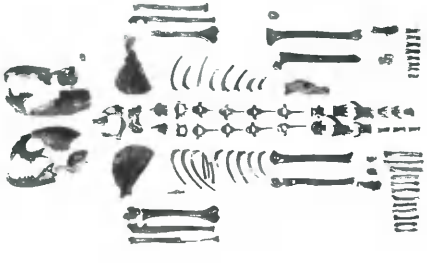



1　十六夜山古墳出土須恵器（1/3）




2　古代の遺物（1/4）

3　井戸 1 出土銅銭（1/2）



4　井戸 1 出土動物遺体（猫、1/6）

1　井戸２出土遺物（1/2）

2　土壙13出土銅銭（1/2）

3　溝４出土備前焼摺鉢（1/4）

4　集石１出土陶器（上1/3、下1/4）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130

十六夜山古墳
十六夜山遺跡

県立津山高等学校校舎改築に伴う発掘調査

1998年３月13日　印刷
1998年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山市西花尻1325－3
発　行　岡山県教育委員会
　　岡山市内山下2－4－6
印　刷　西尾総合印刷株式会社